

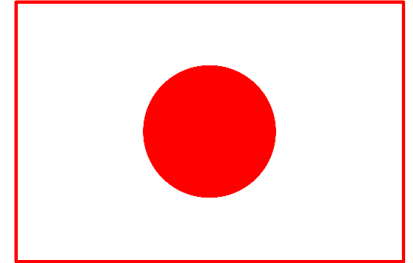
第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会報告書

視察期間:2025年11月24日(月)~12月4日(水)



友情

Freundschaft



左 ランツフト市庁舎にて

右 ニュルンベルク市スポーツクラブにて

主催:群馬県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会

主管:特定非営利活動法人新町スポーツクラブ

後援:スポーツ庁・全国総合型地域スポーツクラブ連絡協議会・群馬県・群馬県教育委員会

訪問地:バイエルン州スポーツ連盟・ミュンヘン市・ランツフト市・ニュルンベルク市

通訳:高橋範子さん・ニュルンベルク市 現他スケジュール調整:ミハエル フォス氏

【目次】

1.参加者名簿

2.訪問日程

3.写真日記と配布名簿

4.参加者報告書

(音声データ資料含む)

2025 第4回 ドイツスポーツクラブ視察研修会参加者名簿(11/24~12/4)

NO	氏 名	所属クラブ・団体
1	齊藤 フジノ	一般社団法人 平山台文化スポーツクラブ
2	松澤 淳子	早稲田大学非常勤講師
3	有田 いず美	認定特定非営利活動法人カタリバ
4	星野 千春	NPO法人川場村スポーツクラブ
5	小谷 魁星	高崎健康福祉大学高崎高等学校
6	圓山 昌之介	一般財団法人 どんぐり財団
7	藤原 佑樹	公益財団法人山梨総合研究所
8	小出 利一	企画・運営・引率責任者 NPO法人新町スポーツクラブ

訪問日程

第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会 2025

年月日	プログラム	時間
24.11. 2025	羽田空港第2ターミナル23:30発 (NH217)	
25.11 .2025 曇り時々雨	曇り空のミュンヘン空港 6:25到着 Mr.Önderさんが出迎えに来てくれて、ミュンヘン市内のホテルまで案内していただいた。	ca. 6.25
	Mr.Önderさんがグループが到着する前に空港から駅までのチケットを購入してプレゼントしていただいた。	ca. 7.30
	https://www.hotel-deutsches-theater.com ホテルに到着後直ちに部屋には入れた。 ホテルドイツ シアター ラントヴェーシュトラーセ Landwehrstra ß e 18, 80336 ミュンヘン	ca. 8.15
	トラム20/21でスポーツハウスへ出発	ca. 8.45
	スポーツハウス(MSJ)でMr.Önderさんが用意してくれた朝食を食べる	
	U6でミュンヘン工科大学コノリー通りへ出発	ca. 9.30
	MR.Ben Schulze 's presentation.アシスタント Ms.Lena Wilde キャンパス・コノリー通り32番地またはオリンピアキャンパス11番地にて オリンピックパーク内	10.00
	昼食場所:スポーツハウスのドイツ料理のレストラン Ms.Lena Wilde(バイエルン州スポーツユース協会(BLSV e. V.)所属、州レベル国際青少年活動コンサルタント)が同行し、その後ミュンヘン工科大学に戻ります。	12.00
	スポーツハウスに戻り、ミュンヘンスポーツユースによる短い歓迎を受ける	
	ミュンヘン市内中心部での自由時間/ホテルへの戻り	ca. bis 17.00 Uhr
18:30 マリエン広場集合 Mr.Önderさんが合流	ca. 17.30	
Mr.Önderさんの案内でスポーツクラブESVミュンヘンe.V.への訪問 - Hayssams Sportloungeレストランでの ディナー(レストランとスポーツクラブのつながりの例)	abends, ca. 18.30	
26.11 .2025 曇り	ホテルで7時から朝食 / チェックアウト	
	ミュンヘン中央駅でバイエルンチケットを購入 ミュンヘン発9:24 (RE3) に乗車してランツフート	
	10:15 少し遅れてランツフート到着 ランツフート駅にMr.Stefanさんが出迎えてくれた	
	ホテルのチェックイン 直ちに部屋には入れた ホテル レストラン ヴァイエンステファナー シュトゥーベン ニコラストル。51, 84034 ランツフート, ドイツ https://weihenstephaner-stuben.de	
	ホテルからMr.Stefanさんの案内で市庁舎へバスで移動 ランツフート市役所にて市長表敬訪問 ランツフートの結婚式を描いた絵画に囲まれた歴史ある場所だった。 その後、バスで移動 VfLアハドルフ・スポーツクラブ訪問:クラブのプレゼンテーションとスポーツ施設の資金調達に関する講義 ランツフートのクリスマスマーケット訪問 Mr.Marioさんの案内で夕食へ(混んでいてお店を探すのに苦労させた)	12.00 - 12.30 14.00 18.00 - 20.00
	Hotel Restaurant Weihenstephaner Stuben	

<p>27.11. 2025 曇り時々晴</p>	<p>ホテルでの7時から朝食(ホテルの朝食が絶品) ホテルをクラブワゴン車で8:30発 TGランツフトe.V.スポーツクラブ訪問(ランツフト最大のクラブ) ゼリゲンタール(修道院が併設されている学校)で学校長の案内とレクチャー ゼリゲンタールのカフェテリアでの昼食 学校とクラブに関するプレゼンテーション 14:00からMr.Stefanさんのパパの案内でランツフト市内見学 バス1日券を購入 Mr.Marioさんの案内でバスにてETsv09へ移動「社会参加型クラブ」のプレゼンテーション ETsv09クラブハウスのレストランで夕食 ホテルに戻って夕食</p>	<p>09.00 - 10.00 ab 11.00 12.00 - 16.00 17.00</p>
<p>28.11. 2025) 快晴</p>	<p>朝、11/28と30のバイエルンチケットを購入 ホテルで7:30から朝食 ランツフト駅9:49発の列車に乗車 ミュンヘン中央駅10:37着 トラム17でニッフェンブルク場へ移動 ニッフェンブルク城からミュンヘン中央駅へ戻って昼食を購入して直ちに地下鉄で移動 14:15からアリアンツ・アリーナ見学だったが少し遅れたがミハエルさんがベニーさんへ連絡をしておいてくれた お陰で無事に見学で来た ミュンヘン市マリエン広場で1時間フリータイム 17:45からホフプロイハウスにて夕食 ミュンヘン中央駅発19:24RE3に乗車してランツフト市へ戻った</p>	<p>10.00 12.05 - 13.50 14.00 - 17.00 ab 17.00</p>
<p>29.11. 2025 曇り</p>	<p>7:30からホテルにて朝食 ホテルのカンファレンスルームにて9:00からMr.Stefanさんからレクチャー バイエルン州スポーツユース組織、業務、そして ランツフトBSJの活動に関するプレゼンテーション ホテルで昼食(このホテルは食事が最高) バス1日券を購入してランツフト市街地へ バスでトラウスニッツ城近くまで移動してその後、徒歩 トラウスニッツ城から夜景が美しい 夕食は、市内のイタリアンレストラン</p>	<p>09.00 - 11.00</p>
<p>30.11. 2025 曇り</p>	<p>ホテルで7:00から朝食 ホテルをチェックアウト ホテルにMr.Marioが来てランツフト駅まで来てくれた ランツフト駅(9:53発)からニュルンベルク(11:47着)乗車 珍しく定刻運転</p>	<p>09.53 - 11.47</p>
<p>ニュルンベルク市 曇り後小雨</p>	<p>ニュルンベルク中央駅到着 駅にコニさんとミハエルさんが迎えに来てくれた 駅からホテルまで徒歩 荷物預かり 「B&B ホテル」 Marienstr. 8 e 10, 90402 ニュルンベルク https://www.hotel-bb.com/de/hotel/nuernberg-hbf ホテルからワゴン車とドリスさんの車でコニさんのクラブへ VfL ニュルンベルク e. V. のクラブレストランにて昼食 Fam. Chen, Salzbrunner Stra 8 e 38, 90473 ニュルンベルク 電話番号: 0911-58 66 94 90 / Eメール: guangfenchen@googlemail.com クラブ訪問: VfL ニュルンベルク e. V. ホテルにチェックイン ホテルからニュルンベルク名物焼きソーセージレストランまで徒歩 bsj ニュルンベルク主催の歓迎ディナー 「Guldener Stern」にてZirkelschmiedsgasse 26, 90402 ニュルンベルク、https://bratwurstkueche.de</p>	<p>11.47 ca. 13.00 ca. 17.00 19.00 19.30</p>
<p>01.12. 2025 快晴</p>	<p>ホテルにて朝食 ニュルンベルク市内観光(日本人の根橋さんが案内人) ニュルンベルク市役所カフェテリアにて昼食(ニュルンベルク市負担) ニュルンベルク青少年スポーツ協会の活動、難民のスポーツクラブへの統合活動/ニュルンベルク市によるスポーツクラブの推進についての説明(場所:ニュルンベルク市役所、市教育局)講師:マーク・シュタインバーガー(スポーツ開発部研究員)、ミハエル・フォス(ニュルンベルク青少年スポーツ協会教育担当官) ニュルンベルクでの自由時間およびショッピング ニュルンベルク・クリスマスマーケット見学 自由時間 夕食は各自としたが、小出の案内でマリエン広場のステーキレストランで6人が食べた 小谷さん、藤原さんは個別に対応した 子どものためのクリスマスマーケットを見学しながらホテルへ</p>	<p>09.30 11.45 13.00 ab 16.00</p>

<p>02.12.2025 快晴</p>	<p>ホテルにて朝食</p> <p>ミニバス/車で出発</p> <p>コニさんのスポーツクラブの近くの公園を視察(子どもが遊ぶ公園に大人が身体を動かす器具がある)</p> <p>スポーツエリート学校の近くにある講演を視察(学校の生徒たちと交流した)</p> <p>ツェッペリン広場(旧ナチ党大会会場)、ニュルンベルク青少年ドキュメントミュージアム等の広大な遊び場を訪問</p> <p>移民難民とスポーツに関するプレゼンテーション(BLSV地区事務所ドゥッツェントタイヒ)</p> <p>ドゥッツェントタイヒのレストラン「グットマン」にて昼食(お食事は事前予約が必要です。ピザは地区事務所にてご用意いたします)</p> <p>ドゥッツェントタイヒにてニュルンベルク・ローイングクラブ(ヨハネス君のクラブ)を訪問</p> <p>ミニバスでホテルへ戻る レストランへ出発</p> <p>BLSVニュルンベルク地区主催のサヨナラパーティー(住所:Landbierparadies, Sterzinger Stra ße 4-6, 90461 Nuremberg)</p> <p>ミハエルさん、ドリスさん、ナターシャさん、小出と高橋範子さんと来夏の日本紮野訪問などについて打合せも実施</p>	<p>08.30</p> <p>09.00</p> <p>11.00 - 12.30</p> <p>12.45</p> <p>14.00 - 16.30</p> <p>ca. 16.30 18.00</p> <p>18.30</p> <p>ca. 21.30</p>
<p>03.12.2025 曇り時々小雨</p>	<p>6:45 ホテルへミハエルさんがミニバスで迎えに来てくれた。</p> <p>チェックアウト後、ミハエルさんの運転するミニバスでニュルンベルク空港へ</p> <p>ミハエルさんと別れて 7:45発 ルフトハンザ航空バスにてミュンヘン空港へ移動</p> <p>ミュンヘン空港9:50着(バス)</p> <p>ミュンヘン空港のパスポートコントロールが大混雑して通過に1時間以上を要した</p> <p>ミュンヘン空港発(12:55) - 羽田空港 LH714</p>	<p>06.00</p> <p>07.45 12.55</p>
<p>04.12.2025</p>	<p>羽田空港第3ターミナル8:45到着(LH714)</p>	<p>09.15 (Ortszeit)</p>



写真日記と配布名簿

【第1日目 11月24日(月)】羽田空港(晴) 23:30 発 NH217 便にてミュンヘン市へ(曇り)



羽田空港第2ターミナル集合

羽田空港もクリスマス仕様になっていました

**【第2日目 11月25日(火)】真っ暗なミュンヘン空港到着→市内へ
空港に Önder さんが出迎えてくれました**



ホテルチェックイン後
ミュンヘン市内 BLSV 事務局と
ミュンヘン工科大学へ
MR.Ben Schulze からレクチャー。
アシスタント Ms.Lena Wilde

【第3日目 11月26日(水)】ミュンヘン市からランツフト市へ(曇り)



ミュンヘン中央駅にて



ランツフト中央駅にシュテファンさんお出迎え



ランツフト市 カラフルな市街地



市役所は歴史と伝統がある威厳がある建物



ランツフト市市長表敬訪問の会場はランツフトの結婚式の壁画があった

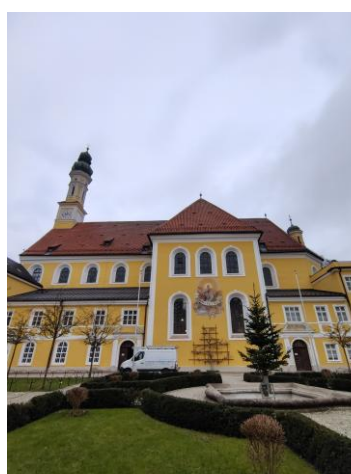


街中で立ち食いドイツ料理



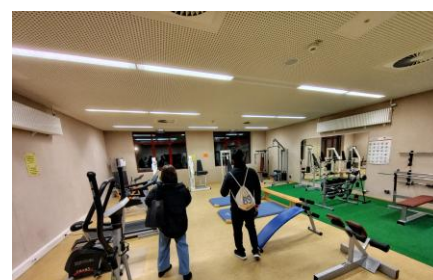
ランツフト市で最初に訪問した「STADTWERKE クラブ」レクチャーの後 施設見学
幼児から小学校低学年世代はパルクールで全身を動かす 14歳のリーダーがいた

【第4日目 11月27日(木)午前】ランツフト市スポーツクラブと私学へ(曇り)



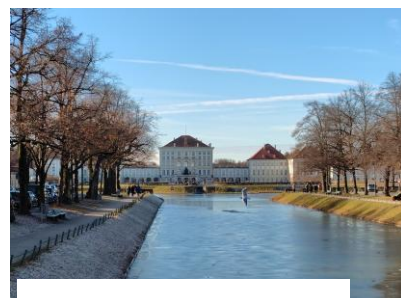
ランツフト市の1861年創立のTGLスポーツクラブでレクチャーを受けた。
このスポーツクラブも会員が千人を超えている大きなクラブ。
次にランツフト市にある修道院が併設している学校(日本流に言うとも小学5年生～高校3年まで)
校長先生自ら学校の概要をレクチャーしてくれた。様々な国籍の生徒から在籍しているため、
ドイツ語ができない生徒は1年間徹底的にドイツ語を学ぶことになっていた。

【第4日目 11月27日(木)午後】ランツフト市街地見学と ETSV09 クラブ視察(曇り)



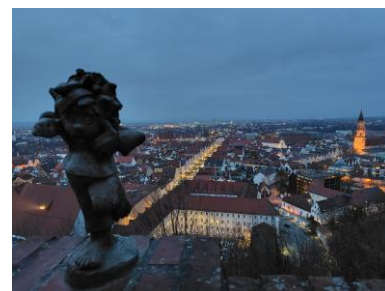
修道院併設学校の学食で昼食後シュテファンさんのお父さんの案内でランツフト市市街地を散策した。レンガ造りの教会として世界一の高さ 132m
その後、バスで移動して ETSV09 クラブ (当初は鉄道員が集まってできたクラブ) でレクチャー&夕食

【第5日目 11月28日(金)】ミュンヘン市内見学・リラックスデー(快晴)



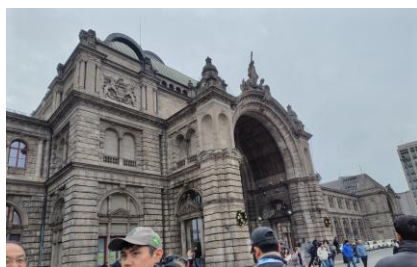
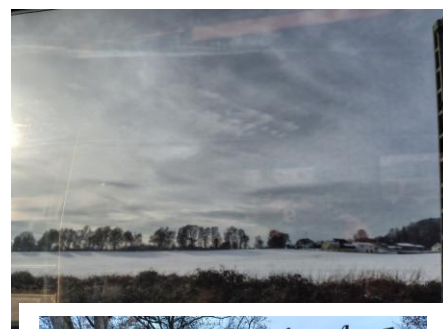
広大なニッフェンブルク城とバイエルンミュンヘンの本拠地アリアンツ・アリーナ見学(選手ロッカーも入って大興奮)

【第6日目 11月29日(土)】ランツフト市(曇り)



午前中は、シュテファンさんからバイエルン州スポーツユースの活動についてレクチャー
ホテルで昼食後 バスで移動して高台にあるトラウスニッツ城へ ここからの夜景は絶景

【第7日目 11月30日(日)】ランツフト市から列車でニュルンベルク市へ(曇り時々小雪)



ニュルンベルク市に到着後 コニーさんのスポーツクラブの施設見学、昼食、レクチャー
クリスマスマーケットを眺めながら夕食へ、歴史ある名物焼きソーセージのお店で歓迎会でした

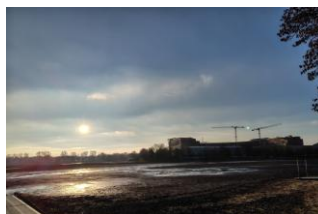
【第8日目 12月1日(月) (快晴)

ニュルンベルク市内見学・ニュルンベルク市スポーツ行政のレクチャー・フリータイム】



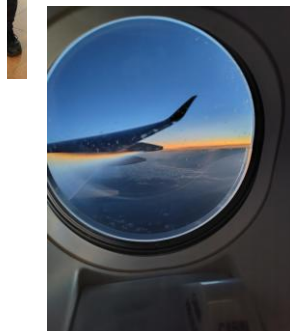
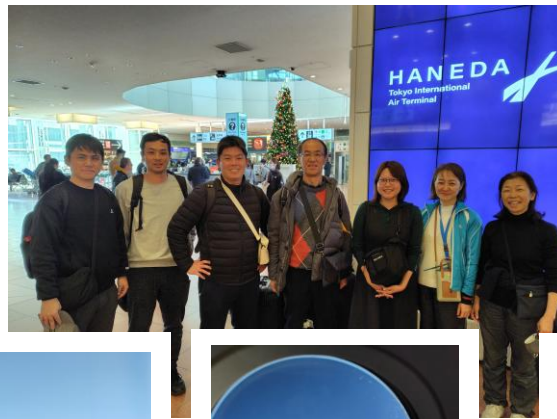
中央駅前から職人広場→旧市街地→カイザーブルク→市役所内レストラン→市役所内へ
市役所内にてレクチャー→フリータイム(ショッピングとクリスマスマーケット)→各自ホテルへ

【第9日目 12月2日(火)】ニュルンベルク市(曇り)市内公園視察・レクチャー
・ボートクラブ

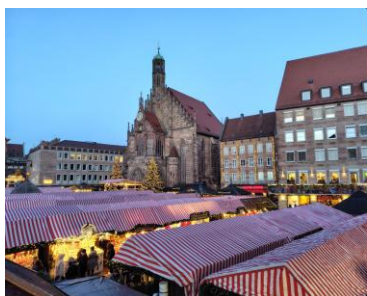
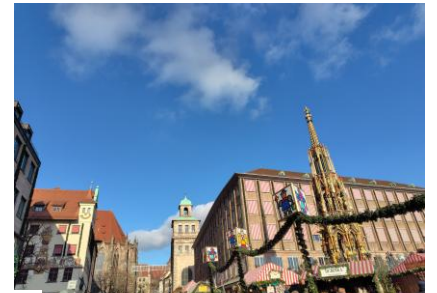


【第9日目 12月2日(火)～最終日 12月4日(木)】

ニュルンベルク市サヨナラパーティー・帰国へ・無事に帰国



【食事・クリスマスマーケット・風景等】



Liste der Trainingsteilnehmer deutscher Sportvereine

2025

Pr ä fektur, in der die
Teilnehmer leben

Gunma Prefecture: 3 people

Tokyo: 3 person

Yamanashi Prefecture: 1 person

Hiroshima Prefecture: 1 person



Freundschaft 友情

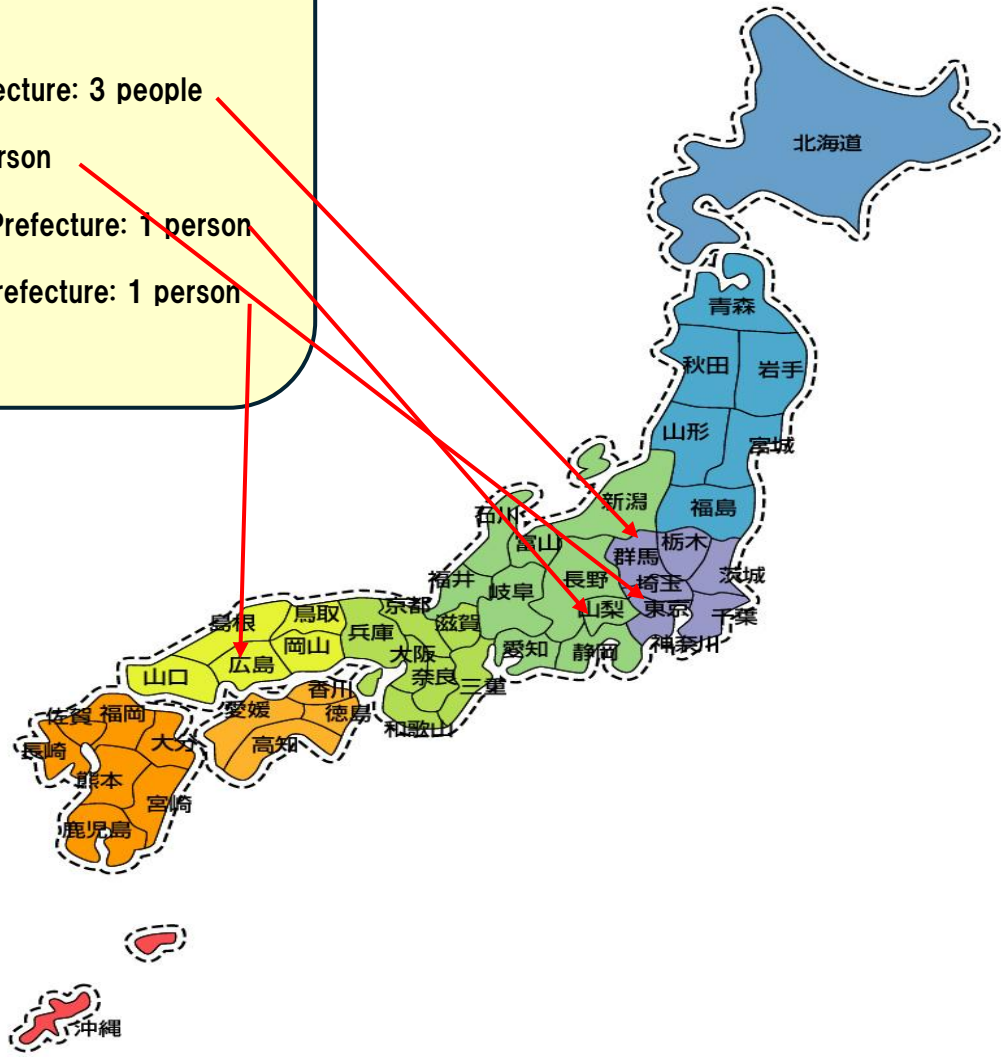










Foto	Name Pr ä fekturen	Lieblingssport	Foto	Name Pr ä fekturen	Lieblingsspor
	Fujino SAITO Tokyo	Tischtennis Futsal Fu ß ball Beach volleyball		Izumi ARITA Tokyo	Touch Footba Badminton Karate
	Junko MATSU ZAWA Tokyo	Yoga Badminton Trekking		Chiharu HOSHINO Gunma	Golf Wandern Burgbe sichtigungunge
	Kaisei KOTANI Gunma	Baseball Softball Handball		Yuki FUJIHARA Yamanashi	Fu ß ball Baseball
	Shouno suke MARU YAMA Hiroshima	Baseball Tennis		TOSHIKAZU KOIDE GUNMA	Fu ß ball Volleyball Skifahren

Gruppenleiter

TOSHIKAZU KOIDE Mo +819039120043

〒370-1301

2483-2 Shinmachi Takasaki-City

Gunma JAPAN

e-mail: shimmachi.sc@gmail.com

参加者からの報告書

掲載順：五十音順・敬称略

第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会 報告書

有田いづ美

●ドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせることは？

今回の研修会では、ミュンヘン市、ランツフート市、ニュルンベルク市の3つの自治体を訪れる機会を得た。いずれも旧西ドイツに位置し、地理的にはドイツ南部のバイエルン州に属している。実際に現地を歩きながら、それぞれの自治体でどのようなスポーツ環境(施設)が整備されているのかを見てきた。ここでは、まずその概要を整理したい。

ドイツのスポーツ環境

(1) ミュンヘン市のスポーツ環境

ミュンヘン市では、まずバイエルン州スポーツ連盟(以下、BLSV)の事務所を訪れた。BLSVは青少年育成を担う団体で、若者が自由意思で多様な活動に挑戦できるよう後押ししている。具体的には、政治参画、奉仕活動、国際青少年交流など幅広い分野を扱っている。

次に、オリンピックパーク内にあるミュンヘン工科大学スポーツ・健康科学部のキャンパス(TUM Campus im Olympiapark、以下 TUM)を視察した。TUMではスポーツ教員の養成やスポーツ科学の教育・研究が行われており、現地での講義では「来年からドイツ全土で、午後の時間も学校で過ごせる制度が導入される」という興味深い話を聞くことができた。ドイツの学校は、基本的に昼までで授業が終わり、子どもたちは家に帰って母のつくった昼食を食べる—こうした流れが伝統的なスタイルとして受け継がれてきた。

その後、もともと鉄道会社の職員向けに設立されたスポーツクラブ「ESV ミュンヘン」を訪れ、クラブ内のレストランで食事をとった。平日の夜ということもあり利用者は少なかったが、普段は多くのクラブ会員で賑わっているようだ。

最後に、FC バイエルン・ミュンヘンで知られるアリアンツ・アリーナを見学した。アリーナ内を巡るツアーに参加し、ロッカールームやベンチ、さらにはピッチに立つ体験もさせてもらった。ツアー時は無観客ではあったものの、赤を基調としたスタンドに、赤いユニフォームをまとった観客が入ったときの迫力を想像すると、その高揚感は計り知れない。

コラム①:「ゲマインシャフト」と「名誉職」

今回の研修会で特に印象的だった言葉に「ゲマインシャフト」と「名誉職」がある。ゲマインシャフトとは、血縁や地縁といった結びつきによる共同体であり、基本的には利害関係を前提としないつながりを指す。対義語は「ゲゼルシャフト」で、利益や目的によって形成される関係性を意味する。ドイツのスポーツクラブの多くは、このゲマインシャフトを基盤としており、地域に暮らす老若男女が気軽にスポーツを楽しめる場として機能している。また、もう一つのキーワードである「名誉職」とは、いわゆるボランティアのことである。今回、私たちが案内してくれたスポーツクラブ関係者の多くも名誉職(の指導者や理事)として活動しており、地域スポーツをささえる大きな力となっていた。

(2) ランツフト市のスポーツ環境

ミュンヘンから列車で移動し、ランツフト市へ向かった。最初に訪れたのは「アハドルフクラブ」である。このクラブの特徴として、15歳から28歳ほどの年代にはサッカーやハンドボールなどのチームスポーツ種目をあえて設けておらず、「**チーム化しない(競技スポーツではなく余暇スポーツを重視する)**」方針を意識している点が挙げられる。

次に、ランツフト市の公共スポーツ施設「Sportzentrum West(西地区スポーツセンター)」を訪問した。同施設を拠点とするクラブは、バイエルン州内で10番目の規模を誇るスポーツクラブである。講義を担当してくださったアイクナーさんは、「クラブ組織において総会が極めて重要である」と強調していた。総会とは、原則としてクラブ会員全員が参加する会であり、年間報告、近況報告、理事会の選挙などを行う、まさに**クラブ民主主義の要となる場**だという。ドイツでは27歳までを「青少年」と位置づけ、その成長を見守る対象とするが、**総会の中でも青少年の意見をクラブ運営に反映することを大切にしている**とのことだった。一方で、実際には総会の出席率が低下しているほか、名誉職に携わる人材も減少傾向にあると話していた。それでも名誉職を続ける人々について、アイクナーさんは「**スポーツが好きで、クラブを大きなファミリーのように捉えているから続けている**。結局は価値観の問題だ」と語っていたのが印象的である。

最後に、ランツフト市での案内役を務めてくれたマリオさんが所属する「ランツフト ETSV09」を訪れた。ここで特に心に残ったのは、「アナベル」という3~4歳ほどの女の子の姿である。クラブハウスで食事をしているときに私たちへ話しかけてくれただけでなく、ほかの団体にも明るく声をかけ、クラブハウス内を全力で駆け回り、椅子や机の陰に隠れてかくれんぼをするなど、まさに“**クラブで育つ子ども**”の姿を体現していた。**成長の過程において、クラブやクラブハウスがごく身近な存在であることは、スポーツやクラブ活動への親しみを自然と育むのではないだろうか**。実際にその光景を目にし、ドイツの皆さんが語っていた言葉の意味を深く実感した。

コラム②: 日本のスポーツクラブとドイツのスポーツクラブの比較

日本とドイツのスポーツクラブの違いを以下の表に整理した。

国	日本	ドイツ
組織	営利と非営利が混在	「ゲマインシャフト」=非営利が中心
目的	趣味、競技、健康増進	青少年育成、地域交流、等
会員の特徴	個人の集合体	世代間交流が盛ん

ドイツには、青少年育成を目的とした共同体(ドイツ語で「フェライン」)が複数存在し、その一つの形態としてスポーツクラブが位置づけられている。**クラブやクラブハウスでの日常的な活**

動や交流の中で世代間のつながりが生まれ、その過程を通して自然と青少年育成が行われている点が、大きな特徴である。

(3) ニュルンベルク市のスポーツ環境

ランツフート市からさらに列車で北上し、ニュルンベルク市へ向かった。最初に訪れたのは「VfL ニュルンベルク」というスポーツクラブである。芝のサッカー場の前には、使用にあたってのルールが掲示されていた。そこには、「1. 子どもたちも楽しみたいんだよ(怒るより褒めよう)。2. 野次を飛ばさない。3. 参加しているすべての人に敬意を払う。4. 審判も人間である(審判に野次を飛ばさない)。5. ここで世界選手権をやっているわけではない(みんなで楽しむ)。」といった内容が書かれていた。子どもを中心に、審判を含めた“その場にいる全員”への敬意を大切にしている姿勢がとても印象的だった。また、これまで視察してきたクラブにも共通していたことだが、「空手」「合気道」「柔道」などの武道種目が多くのクラブで提供されていた点も興味深い。武道場を見学した際には、「忍術(上記の武道の動きを組み合わせたもの)」というレッスンがちょうど行われており、ドイツでどのように武道が受け入れられているのか、垣間見ることができた。

次に、ちょうど庁舎前がクリスマスマーケットで大にぎわいのニュルンベルク市役所を訪れた。市職員のマークさんから、「来年から午後の時間も学校で過ごせる制度が導入される」という話を伺ったところ、ニュルンベルク市ではその制度をめぐって3つの選択肢があるという。まず1つ目は、「青年局(児童相談や子ども家庭相談を担当する所管)」が運営し、学校内に残って過ごせる「HORT」という保育環境をつくる方法。2つ目は、「学校局(教育行政や教員管理を担当する所管)」が放課後も学校を使えるように環境整備を行う方法。そして3つ目が、昼食の時間になったら家に帰るという、これまでの伝統的なスタイルである。どの選択肢を選んだ場合でも、地域のスポーツクラブと協働していく可能性を現在検討しているとのことだった。BLSVには従来から指導者養成コースがあるが、こうした放課後の環境づくりに対応するため、新たに「放課後子ども支援コース」も開設されているという。

視察の最終日は、3つの場所を訪れた。まず向かったのはニュルンベルク市内の公園。ここには大人向けの運動器具が並ぶスペースが整備されており、誰でも自由に使えるようになっていた。そこから少し車で移動し、学校の近くへ向かうと、今度は年齢別(6歳まで、6~14歳まで)に遊べる遊具が配置された公園があった。実際にいくつかの遊具を使わせてもらおうと、大人の私でも難しいものがあり、少し驚いた。年齢に応じた環境づくりをしながらも、子どもたちに“多少の危険”がある遊具にも思い切って挑戦させている姿勢がとても印象的だった。

次にお話を伺ったのは、アンドレアさんと息子のリオさん。お二人は、移民や難民の背景をもつ人々を支援する活動を行っている。ニュルンベルク市では人口の50%が移民・難民であり、約30か国の国籍を持つ人々が暮らしているという。彼らの主な活動は大きく3つに整理

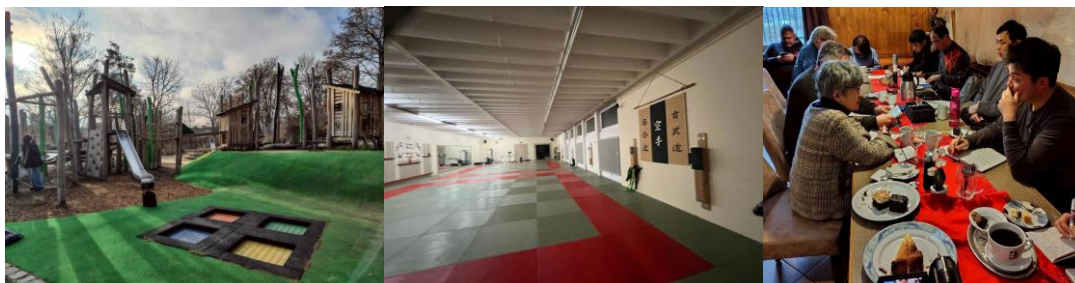
できる。

① 移民・難民の住む場所に出向き、スポーツプログラムを提供したり、指導者(基本は名誉職=ボランティア)を派遣すること。

② 学校やスポーツクラブに赴き、空手などの格闘技やチームスポーツのプログラムを提供すること。格闘技は集中力を養い、挨拶の習慣にもつながるといふ。チームスポーツでは、「一人で頑張る」のではなく「協力する」感覚が自然と育まれていく。

③ 競技スポーツに取り組む移民・難民を支えること。オリンピックを目指す選手もいるが、ドイツ国籍がないと大会に出場できないため、そうした手続きのサポートも行っているようだ。アンドレアさんとリオさんによると、ニュルンベルクは戦後の歴史的な歩みの中で、「人権」と「スポーツ」を大切にす街へと発展していったという。ただ、活動を始めた頃の2年間は“ボランティア扱い”だったが、徐々に理解が進み、今では正式に「仕事」として認められるようになったそうだ。

そして最後に、1880年創立の伝統あるボートクラブを訪れた。このクラブでは、会員の多くが「みんなのスポーツ(余暇スポーツ)」としてボートを楽しんでいるが、次回のロサンゼルス五輪を目指す選手も所属している。青少年理事を務めるヨハネスさんも熱心に講義をしてくれた。彼のもとには、「もっとイベントを増やしてほしい」「トレーニングをもっとゲーム感覚でやりたい」といった青少年の声が届くという。ボートは船の整備にお金がかかるため、会費はほかのスポーツクラブよりも高く、移民・難民の登録は相対的に少ない。ただ、一昔前のように富裕層だけのクラブではなくなってきたという話も印象的だった。



↑ 6歳以下の公園

↑ 武道場

↑ クラブハウスにて食後の講義

地元を活かせること

以上の視察内容より、地元を活かせることは、大きく分けて4つあると考えた。

① 青少年の声を届ける「仕組み」をつくること

——たとえば「青少年理事」のように、子どもや若者が大人の会議に自然と混ざり込めるような仕組みを取り入れること。

② 多世代が関わる居場所を増やすこと

——世代を超えて関われる場をつくることで、自然と「次の世代」が育っていく。

③ 公共空間に、世代ごとの“楽しめる工夫”を取り入れること

——公園に大人用の器具や、子どもの年齢に合わせた遊具が設置されていたように、どの世代も楽しめる公共空間づくりを進めること。

④ 「学校内の環境」と「地域のスポーツクラブとの協働」について、双方の視点から考えること

——ドイツでは「来年から午後の時間も学校で過ごせる制度」が導入されるため、学校環境の整備と地域のスポーツクラブとの協働が検討されていた。日本でも「部活動の地域展開」を進めようとしているが、単に地域側に移すだけではなく、「学校」と「地域」の両方の環境をどう整え、どう協働していくのか——ここをもっと深く考えていきたいと強く感じた。

●プログラム全体として、心に響いて印象に残ったことについて

ニュルンベルク市を案内してくれたミハエルさんの言葉を紹介したい。何度も日本を訪れているミハエルさんは、日本の印象について「勤勉で、食事がおいしくて健康的で、あまり休暇を取らず、そして高齢化が進んでいる」と話していた。一方で、ドイツの人々が大切にしているのは、「自分の幸せを自分で見つけること」や、「スポーツをして、笑って、ごはんをおいしく楽しく食べること」。移民や難民が多く暮らすドイツにおいて、スポーツが“言葉がなくてもつながれる方法”としてとても重視されていることを、あらためて実感した。

●＜番外編＞むすびに：本研修会について

今回の研修会では、小出さんの人脈のおかげで、どの自治体でも本当にあたたかく迎えていただき、多くのスポーツ施設や観光地を案内していただいた。列車で隣り合わせた人でさえ、「これは知っておいたほうがいいよ」と歴史を語ってくれたり、「これは食べたほうがいいよ」と名物を教えてくれたりして、ドイツの人々のまちへの誇りを強く感じた。私自身も浅草や上野のまちを誇りに思っているが、ドイツの方々には土地の歴史を踏まえながら、自分の住む場所を深く愛しているのだと実感した。

また、日本全国からさまざまなバックグラウンドをもつ参加者が集まっていたことも、とても刺激的だった。私は NPO で教育・福祉に関わっているが、参加者にはスポーツクラブ職員、高校教員、財団職員、自治体職員、研究者など、本当に多様な視点を持つ方々がいて、互いの話を聞くだけで学びがあった。

中でも、通訳として参加されていたノリコさんの存在は大きかった。朝から晩まで全力で仕事をされる姿や、ユニークなキャラクター、単身ドイツに渡ったこれまでの人生の話など、どれも印象に残っている。私自身、「ノリコさんがあれだけ頑張っているのなら、私も頑張ろう」と背中を押してもらった気持ちだ。そして忘れられないのが、ノリコさんの一言。毎日ブルーヘアと真っ赤な口紅が素敵なノリコさんに「いつもおしゃれですね」とお伝えしたとき、「着飾らないと、鏡を見たとき自分にがっかりしちゃうでしょ」と返してくださった。その一言から、何歳になっても“最上の自分”であろうとする姿勢を学んだ。

本研修会では、通常の旅行やツアーでは得られない出会いや経験が数多くあった。このプログラムが今後も続くことを願っているが、参加費が50万円強と、金銭的なハードルがやや高い点は気になるところだ。どこか省庁や財団の支援が入り、参加者の負担が軽くなる仕組みができれば、継続への道がより開けるのではないかと感じる。今回訪問したスポーツクラブの財政状況を伺うと、収入の一位と二位は多くが「会費」と「補助金」であった。受益者負担でありながらも、地域や州の補助が大きな役割を果たしている点は、日本や本研修会の今後においても示唆があると感じた。

最後に、本研修会に関わってくださった日本とドイツの皆さまに心より感謝申し上げたい。この研修で得た経験や学びは、これからの活動の糧として大切にしていこう。今回のご縁を一度きりにせず、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



2025年ドイツスポーツクラブ視察研修会を終えて

高崎健康福祉大学高崎高等学校

教諭 小谷魁星

今回、11月24日から12月4日までの期間でドイツスポーツクラブ視察研修会に参加させていただいた。参加に至った経緯としては、私が勤務している高崎健康福祉大学高崎高等学校(以下:健大高崎高校)の「総合的な探究の時間」という教育の柱の授業の中で、新町スポーツクラブの小出利一さんにご縁をいただいたことからであった。健大高崎高校では4つのコースに分かれており、私が2学年アスリートコースの総合的な探究の時間を主任という立場で進めている。今年度の総合的な探究の時間のアスリートコースのテーマが「わたし×まち×スポーツの可能性」で、7月に小出さんに講演をさせていただいたことから私自身が興味を持った。

今回の経験を通して私が地元や勤務校で生かせると感じたことは多くある。前述したように私は現在、高校で教員をしており、私立でスポーツに力を入れているため、体育館やサッカー場、体操場、野球場、テニスコートなど、地域でも有数の充実した施設を有している。この環

境は、今回ドイツで学んだスポーツクラブのあり方を実践するうえで、大きな可能性を秘めていると感じた。ドイツの視察で特に印象的だったのは、日本の部活動の課題と、ドイツのスポーツクラブが抱えている課題には大差がないという点である。指導者不足、教員不足、保護者との関係性、運営費の確保など、どの国にも同じような悩みが存在していた。しかし、決定的に違うのは、日本では「スポーツを楽しむ場所自体が減っている」という点である。公園でキャッチボールが禁止されたり、近隣住民からの騒音苦情で活動が制限されたりと、子どもたちが自由に体を動かせる環境が縮小している。行政は「地域でスポーツを」と掲げるものの、そもそも場所がないという状況では、それを実現することは極めて難しい。一方で、ゼロから施設をつくることには莫大な費用と時間が必要である。だからこそ、すでに施設を持つ学校が、地域にスポーツの場を提供するという発想は非常に有効であると考えられる。しかし現状、日本の小中高は柔軟性に欠け、体育館やグラウンドの貸し出しに対して「事故が起きたら」「鍵の管理はどうする」「教職員の労働時間が」など、すぐに制約や責任問題が議論される。学校側が社会課題よりも自分たちの保身を優先する構造は、改めるべきだと感じた。その点、私の勤務校はすでに地域と結びついた取り組みを進めている。野球部は12月に野球教室を開催し、グラウンドを使わない日は中学生や小学生へ貸し出している。ソフトテニス部も週1回スクールを開き、サッカー一部も毎週小学生向けのサッカースクール、付属幼稚園の子どもたちを対象にしたサッカー教室を実施している。部活動単位で地域と関わる試みは進んでいるが、これを一元化し、例えば「健大高崎スポーツクラブ」といった形で体系化できれば、より広い世代を巻き込む地域スポーツの拠点になれる可能性がある。小中学生だけでなく、幼児から高齢者をはじめとした幅広い住民が参加できるクラブへと発展させることで、地域の健康増進にも寄与できる。

プライベートな話で大変恐縮であるが、私の妻は高校・大学でチアダンスを経験し、大学時代には世界大会にも出場した。しかし、社会人でその経験を生かして指導したいという思いがあっても、地域にはチアダンスをしたいという子ども、チアダンスを教えたいという人の受け皿がなく、実現が難しいという状況がある。これは多くの元アスリートが直面する課題であり、学校が地域スポーツクラブとして受け皿をつくることは、こうした人材の活躍の場を広げることに直結する。現在、学校には大学移転で空いた棟が丸ごと残っており、これを事務所や活動場

所として活用することも可能である。

今回の研修で学んだもう1つの重要な点は、ドイツのスポーツクラブにおける「名誉職(ボランティア)」のあり方である。多くのクラブが名誉職によって支えられ、あるクラブでは1時間あたり8ユーロ、つまり日本円で1500円ほどの謝礼を受け取っている。これは日本の感覚でいえば「ボランティア＝無償」とは異なる考え方であり、むしろ適切に評価された働き方として魅力的に映る人も多いただろう。ドイツでは、スポーツクラブで指導員となるためには123時間の講習の受講が必要だという。普段は別の仕事をしながら、自身の「余暇」を使って指導にあっていた。一方、日本では働き方改革に象徴されるように「労働時間」「お金」といった観点に敏感で、名誉職的な働き方を志す人が減っている。ドイツでの学びを踏まえると、スポーツを「競技」だけでなく「余暇」「生涯活動」として捉える姿勢は、日本が今後取り入れるべき視点である。仕事終わりにソファで寝転がる代わりに、地域のクラブで1時間でも軽く汗を流す。そんな文化が広まれば、地域全体の健康やコミュニティ形成にも良い影響を与えるだろう。

以上のように、今回の研修は、私が教員として、また一人の地域住民として今後取り組むべき方向性を改めて示してくれた。勤務校の豊富な施設と地域とのつながりを強みに、ドイツのスポーツクラブの理念を地元で生かしていくことが、私にとっての大きな目標となった。

また、今回のドイツスポーツクラブ視察研修会を通して、特に印象に残った点は大きく2つある。1つは、小出さんの尽力により、スポーツクラブ、行政、学校といった多面的な立場からドイツのスポーツ環境を見られたことであり、スポーツが地域社会や国全体にどう根つき、人を育むのかを理解する上で、非常に重要な示唆を与えてくれた。今回訪問した各クラブや自治体、学校では、次年度から子どもたちが学校で過ごす時間が長くなるという制度変更を踏まえ、いかにスポーツや地域活動と連携させていくかが議論されていた。こうした「教育」「地域」「スポーツ」の三者が横断的に協力し合う姿勢は、日本ではなかなか見られないものであり、非常に興味深かった。特に、ドイツは運動する場所があることが大きな強みであると感じた。広い屋内外のスペースや専門施設が充実しており、それらを地域でどう生かすかが明確に意識されていた。例えば、ニュルンベルク市の集合住宅には必ずスポーツ広場があった。集合住宅にスポーツ広場を隣接させることがルールとして定められていると聞いた。私自身、今回アスレチックのようなプログラムを体験したが、そこで行われる動きは本来、幼少期に自

然と身につくべきものでもある。走る、登る、跳ぶといったシンプルな動作の繰り返しは、運動神経を鍛えるだけでなく、危険察知能力や体の使い方を理解する力にもつながっていく。ドイツのクラブでは、こうした基礎的な運動経験が体系的に提供されている点が印象的だった。

中でもランツフト市の体育館で見学した Parkour のプログラムは特に心に残った。1人の指導者に対して20人ほどの子どもたちが参加し、その補助として中学生のサポーターがついていた。その姿は、まさに地域全体で子どもを育てる仕組みの一端を象徴していた。若い世代が小さな役割を担い、主体的に関わり、自分の意見を述べる機会を得ていることは、成長の上でも、地域づくりの上でも非常に大切なことだと感じた。この「若者が主体となる文化」は、バイエルンスポーツユーゲント、ランツフト、ニュルンベルク、ミュンヘンなど、どの地域でも共通して見られた特徴である。ランツフト市長が非常に若いことにも驚いたが、それは単なる偶然ではなく、若い世代が地域や政治に参加できる土壌が整っている証拠だと感じた。若い人のエネルギーやアイデアが地域社会を動かす力になっているということを強く実感した。

その一方で、日本では若者が意見を述べると「生意気だ」と受け止められがちである。もちろん伝え方の工夫や学習は必要だが、自分の意見を持ち、何かを動かそうとする姿勢を若いうちから育てることは、教育面でも社会面でも欠かせない。今回、ミュンヘンスポーツユーゲントのエンダー氏やニュルンベルクスポーツユーゲントのヨハネス氏と接し、彼らが自信を持ち、堂々と人と向き合う姿を見たことでその重要性を改めて感じた。言葉が完全に通じなくても、彼らからは「クラブのため」「地域のため」という強い信念が伝わってきた。

もう1つの大きな学びは、ドイツの歴史教育や社会意識についてである。特にニュルンベルク市は、「人権の街」としての取り組みが非常に印象的だった。第二次世界大戦中に成立した差別的な「ニュルンベルク法」という歴史的反省を踏まえ、街全体が人権意識を高める活動を継続している。ミュージアムや芸術作品、教育プログラムなど、過去の過ちを忘れず、社会全体で共有する姿勢が随所に見られた。そこにプラスアルファしてさらに驚いたのは、市内に難民専用の居住施設があり、市のスポーツ担当職員が難民にスポーツプログラムを提供しているという点である。単に居住支援を行うだけでなく、「スポーツを通してつながる」仕組みが行政主体で作られていることは、世界的にも極めて珍しい取り組みである。「スポーツや音楽、芸術には言葉はいらない」という言葉を多くの現場で聞いたが、まさにそれを具体的に体現し

ていると感じた。言葉や文化の違いがある状態でいきなり政策や制度だけを進めようとする、理解不足から対立や分断が生まれやすい。しかし、スポーツを通じてまず楽しさを共有し、関係性が築かれることで、その後の文化理解や言語習得にもつながっていく。この考え方は、日本でも大いに参考にすべきものだと感じた。ただし、日本は島国であり、異文化接触の機会が限定的であるという特徴があるため、ドイツと同じ取り組みをそのまま適用できるとは限らない。それでも、ニュルンベルクのように行政職員が難民のもとへ自ら足を運び、スポーツを通じて共生の土台を築こうとする姿勢から学べる点は多い。特に、こうした活動の初期2年間はほぼボランティアで行われていたという話には、大きな驚きと敬意を覚えた。

一方で、ドイツでは近年、極右政党が若者を中心に台頭しているという話も聞いた。選挙活動でナチス時代の言葉が使われる場面があるという実態は、日本にとっても他人事ではない。過去の歴史から学び、同じ過ちを繰り返さないという点では、日本もドイツも立場は共通している。歴史の正誤は簡単に割り切れるものではないが、少なくとも反省から生まれた努力を続けていく必要があると強く感じた。「共存」という言葉は簡単に聞こえるが、実際には非常に難しい課題である。お互いを理解しようと言葉だけで言っても、実践が伴わなければ現実是不変変わらない。その中で、スポーツが果たす役割は大きい。共に体を動かし、笑い、競い、協力することで、言語や文化の壁を越えて関係性が芽生える。これこそが、オリンピックが「平和の祭典」と呼ばれる所以であり、スポーツの根源的な力であるとあらためて実感した。今回の研修を通して、スポーツは単なる運動ではなく、人と人をつなぎ、地域をつくり、歴史を未来へつなぐ力を持つことを深く理解することができた。これらの学びは、今後の教育現場や地域活動に必ず生きていくと感じている。以上が、今回特に印象に残ったポイントである。

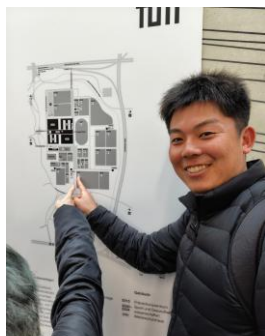
最後に、今回共にドイツでの生活と学びの時間を共にした小出さんをはじめとする皆様、通訳の高橋範子さんにはたくさん支えていただき、素晴らしい時間を共にすることができた。そしてなにより受け入れてくださった、バイエルン州のミュンヘン、ランツフト、ニュルンベルクの皆様には心より感謝したい。人生においてもかけがえのない時間となったことは間違いのない事実であり、このような時間を多くの同年代、若い人に経験をしてほしい。そうすれば地域に学びを還元することができるのではないだろうか。だからこそ、国からの補助金やサポートがあればより一層前向きに歩みを進めることができると考える。金額がネックで参加できない

と感ることがどれほどもったいないか、私は今回身をもって感じた。この経験を生かして、私自身が勤務校である健大高崎高校の地域とスポーツの在り方を発信し、群馬から地域スポーツの発展、そして今後の日本の「地域とスポーツの当たり前」を作っていけるように力を尽くしていきたい。

追伸

・このプログラムは継続するべきだと思います。ただ、双方に負担が大きいものであると思いますので、期間や開催頻度は双方の折り合いがつくところでやるしかないと思います。

・また、補助金に関してですが、これは県なり国なり、行政からの支援が必要不可欠です。行政からの支援がなかったので、今回私は実費で参加をしました。私は現在 27 歳ですが、この年で一気に 50 万円以上(現地での支払い等を含めるとそれ以上)払うのは容易ではないと思います。東京では教職員へ在職中の留学を支援する制度もあるようですが、群馬にはありませんでした。そのため、この費用を所属している学校(私であれば)が負担するのも違うと思います。将来的に部活動の地域展開や、このレポートに記載したようなことを実現したいと考える人を増やすためには、全額でなくとも補助は必要不可欠ではないでしょうか。



【第 4 回ドイツスポーツクラブ視察研修会】

一般社団法人平山台文化スポーツクラブ 齊藤 フジノ

① ドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせること

スポーツクラブ全体の活動報告や青少年育成に関連する事で、国として非常に力を入れている部分や大きな支援をする体制が整っていると感じました。設備投資や費用の面でも拡充されているように思いました。

オリパラ、デフ、などオリンピックを早期開催した歴史も実績もあります。

そこにはボランティアのサポートがとても大きく関与していて関わるスタッフの方々が自主的に取り組まれていて、自身もスポーツに参加し楽しむことを根底に活動されていました。

実際の活動の様子を見学し、幼児クラス・ジュニアクラス・大人の武道など、特別に国の違いはそれほど感じませんでした。プログラムの種類や用具、施設、設備面では機能性も兼ね備えた合理的なもので非常に興味を持ちました。訪問したスポーツクラブの新旧を問わず、整理整頓が行き届き、体育館内装の素材、衝撃緩衝材や屋外芝生の生育方法など日本と違い質実剛健の異名を持つ特質したドイツの印象を受けました。

私のクラブはシニア主体ですので、シニアに関してのプログラム設定や抱える問題は一緒だと感じました。ジュニア育成はスポーツクラブの継続にも大きく影響するのでその部分を重点に今後取り組んでいきたいと思いましたがノウハウが弱いので具体的にアドバイスを受けたいと感じました。

どのクラブもレストランを併設してありましたが、これはスポーツクラブ利用後などにコミュニティーの場として活用することで活性化に繋がりますし、スポーツクラブ利用外でもランチやディナーの場として利用することは相乗効果が見込まれます。地域の活性化にも繋がるように感じました。また、ドイツの移民受け入れに付随して国籍や貧富の差がなくても気軽にスポーツに関われるためにスタッフやボランティアの方々が日々努力され環境を整備されている活動にはとても感動しました。

言語や人種の違いを気にせず抵抗なく楽しめる手軽なツールだと思いますが軌道に乗るまでの労苦ののちに今日に繋がっていると思います。元ドイツ首相が、移民を全て受け入れる、と公言していましたが、今回の説明を受けた感想として寛容から厳格化へと移行しているようにも感じました。

先進国ではあっても受け入れ態勢や物事のとらえ方は、領土と財政、国民性など様々な条件が必要になると思いますし非常に重要で困難な課題です。それでも継続していることは凄いことです。個人的には根底に過去の戦争が大きく影響している背景があるように感じました。未だに人種軽視の歴史が残存しているイメージも先行していましたが、スポーツにかかわる方々、また取り組む姿勢には尊敬しかありません。

スポーツというものの本質がそこにあることを痛感いたしました。微力ながら日本に恩恵をもたらすであろうこの研修が今後も継続し取組んでもらえるよう願います。

② プログラム全体通して、心に響いて印象に残ったこと

関係各所の皆さんがスタッフも役員関係者も自身がスポーツにかかわりスポーツ活動に参加し心身ともに活性化されているように感じました。

その環境はジュニア世代にも羨望として映り継続の礎になっていると思います。また、ボランティアとして従事し見返りや謝礼をもらうなどの見返り考えを持たず、率先して好意的にフラットに関係性を継続していることに感嘆しました。そこにスポーツの意義があると感じました。

ただ、役員を選出には困難な状況もあり必然的に延長継続となるケースが散見されました。

このことは、日本も非常に似ていて、新規参加者に加入してもらい、参加したくなる仕組みづくりはマストだと感じました。ただ、ジュニアの会員が多い事としては次世代に継続している証拠なので素晴らしいことだと感じました。

いろいろな分野・職業でドイツとかかわることがあると思いますが、言葉や国籍の障害もなく人々の交流が融合し取組めるスポーツは大変素晴らしい事と思います。そこに気付いて取組みながら広く発信している部分はエネルギーでした。

移民受け入れでボランティアとして活動されていたスタッフの方々などは、多国籍人種の方を対象に想定以上の非常に多種多様な問題が起きていたと思いますが、立派に軌道に乗せて活躍されている姿に感銘を受けました。居住や生活を整備した後に、スポーツ参加を推奨する時期や、タイミングは非常に難しいように思いますが、提案された事案を軌道にのせていて非常に関心深く思いました。

また、現在小学生と幼稚園の子育てをしているドイツ在住の日本人の方ですが、放課後の過ごし方として、富裕層は高額な習い事レッスンに所属していますが、まだ1/3程度と聞いています。国の方針で放課後の活用法が今後変わる事により保護者の間では話題になっているそうです。従って、安価で安心できるスポーツクラブに移行できると良いと感じました。

個人的にはゴミ処理対策にも興味があり、特にユーロ圏内は進んでいます。ドイツは早期取組み循環経済・廃棄物法が65%程に進んでいるそうです。行政ではゴミ袋の配布があったり、早朝には道路清掃車が始動していたり、また住宅街では分別用のトンネ(コンテナ)設置を目にしました。訪問先では分別用のゴミ箱が設置されていて市内も市外も大変きれいに整備されていました。買い物客はほとんどがショッピングバッグ(もしくは素手で持ち帰る)を持参し、デパートの商品も簡易包装でシンプルに高貴なイメージを受けました。

日本のようにコンビニの袋を持つ人なく、日本はエコの意識は進んだもののまだまだ個包装や過剰包装であると痛感致しました。また、ペットボトルのデポジット制も随所に設置してありました。

重複した感想になってしまいましたが、行く先々で出迎えてくださった現地スポーツクラブの皆さま、研修参加に関わってくださった皆さまに心より感謝申し上げます。お世話になりました、ありがとうございました。

- ③ このプログラムは継続したほうが良いか、継続するに必要なこと、補助金について今後も継続されることを願います。

ドイツとここまで友好関係が続いている事はこれまでの活動の成果だと感じました。

これまでの労苦が報われることは今後の継続にあると思います、次世代につなげる為に

も必須だと思いますし、更にはフレンドリーな親日ブームが途切れることは残念です。

- ・ 研修が日本のスポーツ関連事業において貢献度としては高いと思いますが、参加者がいかに実現し活動に対し実践できるかとなると費用対効果として承認がおけるような活動が必要です。

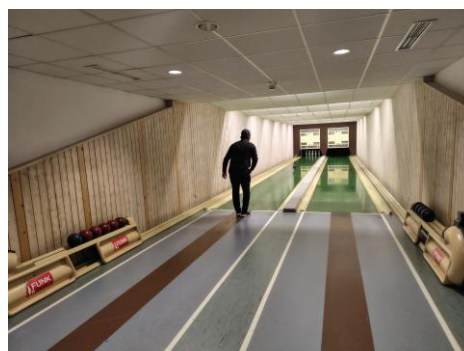
東京都ではジュニア、シニア対象の補助金には積極的に推奨しています、精査には時間がかかるとは思います、申請の継続を望みます。

承認が下りなくても特に補助金活用ではない個人負担がベターのように感じました。

レポート提出が微力でも国内やスポーツ関連のいずれかで反映される情報となるならば、レポート提出の情報提供料として(1,000円～5,000円程度のケイ・アマギフ)等で検討してもらうなど、いかがでしょうか、思い付きですがただ、このレポートが提出先の1人でも多くの方に目を通していただき、お役立て下さることを切に願います。

★参加にあたり

お詫び:スケジュールでランツフトで3番目の説明では疲労困憊でほとんど脳が機能していませんでした、ご説明に時間を作り準備してご案内してもらいましたが記憶が飛んでいて本当に申し訳ないですし残念です。夕飯のカフェ利用に繋がって組まれていたと思いますが、非常にタイトに感じました。



第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会 報告書

山梨総合研究所 主任研究員 藤原佑樹

1. はじめに

総合型地域スポーツクラブとは、「いつでも、どこでも、だれでも、いつまでも」スポーツを楽しむことができる社会の実現を目的とした、年齢に関係なくだれでも参加できる地域のスポーツクラブである。しかし、令和6年度に実施した山梨県の調査では、県内400人を対象にアンケート調査を行ったところ、「総合型地域スポーツクラブを知っているか」の設問において、「知っている」と回答した割合は2割にも満たなかった。認知度が低いということは、利用者はさらに少ないことが簡単に想像できるだろう。

そこで、総合型地域スポーツクラブの先進地である、ドイツのスポーツクラブの視察を踏まえて、ドイツにおけるスポーツのあり方や地域にとってのスポーツクラブの位置づけなどについて学ぶとともに、日本や山梨県に合ったスポーツや総合型地域スポーツクラブのあり方について考察する。

2. 日本とドイツの違いやドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせること

ドイツのバイエルン州にあるミュンヘン、ランツフト、ニュルンベルクのスポーツクラブの話を知るとともに施設の視察をしたが、日本とドイツでは、スポーツに対する認識が大きく違っていることがわかった。大きな違いとしては以下の4つがある。

(1) 総合型地域スポーツクラブの数および加入率

ドイツの人口は約 8,300 万人に対し、スポーツクラブの会員数は約 2,900 万人と、約 35% の人口がスポーツクラブの会員になっている。市レベルでも、ランツフトでは 46.7%、ニュルンベルクでは 22.0%など、どの地域においても多くの住民がスポーツクラブの会員になっていることが分かる。一方、日本や山梨県の場合、スポーツクラブへの加入率はそこまで高くなく、総合型地域スポーツクラブの数も非常に少ない。

この加入率の違いは、スポーツをすることが楽しい、喜びにつながると利用者が理解していることに加えて、スポーツを活用した社会課題の解決や、スポーツクラブの存在がコミュニティの形成に繋がっているからではないかと考える。社会課題解決の1つとして、バイエルン州では、移民・難民の受け入れプログラムの1つとしてスポーツを活用している。スポーツをするためには言語は必要なく、言葉が通じなくてもスポーツ活動を通じてコミュニケーションをとることができる。スポーツをきっかけにコミュニケーションが始まることで地域に根付き、コミュニティの形成に役立つことで、その地域で過ごしやすくするような支援につなげている。

また、クラブによって年齢制限は違うが、幼児向けのプログラムには生後 6 か月から利用する会員もいることや、高齢者向けの健康増進プログラムなどに参加するなど、同じ境遇にいる会員同士の交流もある。さらに、クラブハウスには食堂があり、誰しもが利用しやすいよう比較的安価で食事を提供していることから、クラブの会員だけでなく、周辺に住む地域の方にとっても交流しやすい環境が整っており、地域に欠かせない場として成り立っている。



図表1

	日本	山梨県	バイエルン州	ニュルンベルク	ランツフト
人口(人)	123,371,000	784,942	13,000,000	500,000	75,000
総合型地域スポーツクラブの数(施設)	3,581	35	11,500	200	187
会員数(人)	—	—	5,000,000	110,000	35,000
割合 (会員数/人口)	—	—	38.5%	22.0%	46.7%

出典:日本の人口は総務省統計局 2025 年6月確定値。山梨県の人口は山梨県常住人口(令和7年6月1日現在)から抜粋。日本および山梨県の総合型地域スポーツクラブの数はスポーツ庁「令和6年度総合型地域スポーツクラブ育成状況調査」より抜粋。ドイツの内容は視察・聞き取りより筆者作成。

(2) 青少年によるクラブ運営への関与

ドイツでは学校が午後1時には終わり、その後はスポーツクラブで活動する子どもたちが多いため、青少年(27歳までの若い世代)によるスポーツクラブへの参加率が非常に高くなっている。日本では学校の放課後は部活動があるため、学校終わりに総合型地域スポーツクラブに通うことは少ないと思われるが、日本との大きな違いは、青少年がクラブの運営に意見を伝えるとともに、その意見をクラブが運営に反映していることである。ドイツでは、クラブの運営のために州や市が補助金を出しているが、補助金の加算要件として、「理事会に青少年代表を入れること」としており、27歳以下の若者を青少年代表として理事会に1人入れることで、青少年からの意見を反映するようにしている。例えば、青少年からの意見として、「クラブでのイベントを増やしてほしい」、「プログラムをもう少し楽しくできる工夫してほしい」などの意見があり、その意見を運営が可能な限り反映することで、青少年が運営に関与する工夫をしている。また、ニュルンベルクでは公園を作る際、子どもたちの意見を必ず聞き、可能な限りその意見を反映している。2022年9月に作成されたマスタープラン「Stadtspark Präsentation Masterplan Bürgerbeteiligung」をみると、「Spiel und Bewegung(遊びと運動・子どもの遊び場)」のセクションで、子どもたちを含む利用者の意見聴取から、クライミングができる構造物や水遊び場の設置の要望があったことから、公園の遊具として反映されている。日本ではそもそも意思決定の場に青少年が参加することは非常に少ないが、ドイツでは青少年からの意見を尊重し、数多くの意見を実現してきた。その違いが、社会活動への参加や政治への興味などに反映されているのではないだろうか。

(3) 行政による支援の充実とクラブとの連携

視察先のミュンヘン、ランツフート、ニュルンベルクの総合型地域スポーツクラブの収益構造をみると、収入の大半は「会費」となっており、そのほかは「行政からの補助金」や「自施設の貸し出し料」、「イベント実施時の入場料」などである。一方、支出では「人件費」が主であり、そのほか「施設の利用率」や「市への賃貸料」などがある。市への賃貸料とは、クラブの活動場所となる土地もしくは建物のどちらかが市の所有物であることが多く、賃借料を市に払ってクラブを運営しているためである。また、自クラブで所有している体育館やグラウンドのみでは活動場所が足りない場合、市の施設や学校の体育館を借りる場合があるが、そうした場合は市から使用料の減免がある。

日本でも、市の施設をクラブが使用する場合、使用料を減免するという制度があることに加えて、指定管理者制度により、施設の管理に必要な人件費を行政が支援しており、ドイツと形は違っても似たような支援をしていると思われた。一方で、行政との連携で大きく違うことは、ドイツではクラブの意見を行政に伝える窓口が明確にあることで、その意見が行政に反映されやすく、行政とクラブの密接な連携に基づく支援ができていていることにあると考える。具体的には、ドイツでは行政にスポーツクラブの意見を聞く窓口として、市長直轄の職員が窓口におり、クラブ代表者から意見を直接聞き、課題を共有し、必要な対策を検討している。また、ニュルンベルクでは、クラブの維持にかかる補助金の確保だけでなく、クラブが新しく施設を整備する際には、未来への投資という形でクラブ運営費の補助とは別に、必要な金額の45%までは市で補助することとしている。さらに、州からの補助金に加算されることから、施設の建設には行政が多大な支援を行っている。毎年予算の上限がある程度決まっているため、いつ補助金が支払われるか待つ必要があるが、スポーツが市民の生活に重要なものであると認識しているからこそできることではないだろうか。

(4) 有償ボランティアとして活動する人の意識の違い

ドイツでは、指導者だけで生活をしている人は非常に少なく、ほとんどが有償ボランティア（ドイツでは名誉職という）として活動している。主な仕事は別にあり、自身の余暇時間で指導を行っている。こうした有償ボランティアでの指導者の数が非常に多く、彼らの活躍によってクラブは活動を継続できている。日本とドイツでは、こうしたボランティアが活動する意識に大きな違いがあると考えられる。日本では、人や社会に貢献したいという思いや、支援や活動を通して誰かの役に立ちたいといった気持ちが主であると思われるが、ドイツでは、「自身が楽しいからやっており、人のためや感謝されるためにやっているものではない」という意識の違いがある。

以上、日本とドイツのスポーツ活動における違いを挙げてきたが、これらを踏まえて、日本や山梨県に活かせる内容や仕組みについて、以下のとおり考察する。

①スポーツを交流の手段として活用し、スポーツをより身近に感じてもらうこと

日本では、運動やスポーツをする人は多いが、1人で行うウォーキングやジョギングなどが主となっており、健康増進やリハビリとして活用はされているものの、コミュニティの形成にまでは至らないように感じている。また、日本でのスポーツといえば「競技スポーツ」として認識されている印象が強い。勝ち負けにこだわることで得られるものもあるが、勝ち負けにこだわりすぎてしまい、それが優劣や差別を生んでしまっただけでは意味がない。スポーツをすることが楽しいと感じてもらえることができれば、幸福に過ごせる人が増えるのではないだろうか。さらに、スポーツは国籍や年齢、性別など様々な障壁を越えて交流できるツールである。子どもから高齢者の健康増進、さらには国際交流の一環としてもスポーツを活用することで、人と人との交流につなげることができるため、スポーツをする機会をより多くすることが必要ではないだろうか。その場所が地域のスポーツクラブであればクラブの利用率も高まり、地域の人が集まる場所＝スポーツクラブとなることもあり得るだろう。

②行政からの支援の形を変化させていくこと

日本では総合型地域スポーツクラブの会員数が少ないことに加えて、指導者の質と量が不足している。さらに、指定管理者制度がなければ、クラブ運営そのものを継続することも難しいといった現状がある。今後、部活動の地域移行が進めば会員数がある程度増えることも考えられるが、依然として指導者不足は課題となるだろう。

指導者の収入だけで生活していくためには、複数種目の指導ができるようになることや、会費を高くする、もしくは会員数を相当数増やすことができなければ実現は難しいため、ドイツと同様に、クラブでの指導者は有償ボランティアに頼ることが必要となるだろう。日本でも同様にボランティアに頼っているところではあるが、行政からの支援は指導者の資格取得の支援だけであることが多いことから、行政からの支援を充実することが必要ではないだろうか。例えば、

- ・指導者の質や数、プログラムや実施する種目の数に応じて、スポーツクラブへの補助金もしくは指定管理の金額の上限を増やす

- ・指導者にかかる謝金の費用を補助する。資格取得にかかる費用を補助する(条件として資格取得後はそのクラブで数年間働くこととする)

- ・子どもや高齢者への健康増進プログラムをクラブへ委託することで、子どもの頃からのスポーツクラブ認知度を上昇させるとともに、高齢者も運動機会を増やすことができる

などが挙げられる。子どもの頃から、また大人になってもスポーツクラブに関わり続けることで、「このクラブになら指導者として活動してもいい」といった気持ちを持てるような雰囲気づくりをすることが、指導者として活動するためのきっかけになるのではないだろうか。

3. プログラム全体として、心に響いて印象に残ったこと

当視察研修会で特に印象に残ったことは、以下の2つである。

(1) スポーツ活動は言語を超えた交流のツールとなり、人生を豊かにすることができる

スポーツは国籍や年齢、性別など様々な障壁を超えて交流できる万能なツールとして、移民・難民を受け入れるプログラムの1つとして提供されている。確かに、国や地域によってスポーツに細かな違いがあるかもしれないが、基本的なルールは同じなため、言語が通じなくても交流するきっかけとなることができる。これは移民や難民だけでなく、日本や山梨県における国際交流や世代を越えた地域住民との交流の一環としても活用できるのではないだろうか。また、スポーツを楽しむことで、自身の人生を豊かにできるということを再認識できた。

(2) スポーツクラブは健康を維持するだけでなく、自己実現の場であるとともに、地域住民にとって欠かせない場となり得る

ミュンヘン、ランツフート、ニュルンベルクのスポーツクラブでは、生後数カ月の子ども向けのプログラムの提供から始まり、高齢者の健康増進やリハビリプログラムなど、幅広い年齢層を対象とした多種多様なプログラムを提供している。青少年においても、意思決定の場に参加することで自身の意見を表明でき、それを実現する体制が整っていれば、青少年の自己実現や活動の後押しができる。また、会員同士の交流だけでなく、周辺の地域に住む方や運営、会員も一緒になって活動することで、スポーツクラブが地域に欠かせない場所として存在している。

(3) 行政による多様な支援と地域と連携した地域づくりをしていること

ドイツでは、スポーツは人の生活において必要なものであると認識されており、スポーツは人生を豊かにできる重要なものであるからこそ、行政による多大な支援が提供されている。この支援はただクラブ運営を継続するためではなく、今現在の子どもたちや青少年の意見を尊重し、自己実現の手助けとなるような支援方法であるとともに、未来への投資として惜しみない支援をしていることが、とても印象的であった。また、ニュルンベルクでは市長直轄職員が直接クラブ代表者から話を聞いていることから、行政と地域との距離が近く、地域で起きている課題に真摯に対応する姿勢を表しているともいえるだろう。

日本でも運動やスポーツをしている人は多いものの、スポーツを通じた地域との交流やコミュニケーションは少なく、コミュニティが形成されにくい傾向があるように感じる。ドイツのように年齢を問わずスポーツを通じて交流が生まれ、クラブハウスを中心にコミュニティが形成される仕組みがあれば、地域の活性化や孤独・孤立といった社会課題の解決にも繋がるだろう。日本の文化や慣習ではオープンな交流はやや難しい面もあるが、こうした文化は見習うべきものだと感じている。

4. おわりに

当視察研修会に参加したことで、日本との違いを目の当たりにするとともに、スポーツが様々な障壁を越えて人生を豊かにする素晴らしい活動になることを再認識することに繋がったと感じている。ただ人から話を聞くだけでは伝わらず、現地に行つてどのような活動をしているのかを、実際に目で見て肌で感じたからこそ、その違いをより鮮明に感じる事ができたため、この視察研修会を継続することに価値はあると考える。特に、バイエルン州の中で複数の市を訪問し、それぞれの市にあるクラブの特徴や内容を規模ごとで比較できたこと、日本の都市の人口規模と近い市の文化も知る事ができたことは、自分の住む日本や山梨県との比較にもつながるため、この経験を今後の日本や山梨県のスポーツ振興に生かしていきたい。

【補足:プログラムについての意見】

当視察研修会に参加したことで、日本との違いを目の当たりにするとともに、スポーツが様々な障壁を越えて人生を豊かにする素晴らしい活動になることを再認識することに繋がったと感じている。ただ日本で人から話を聞くだけでは伝わらず、現地に行つてどのような活動をしているのかを、実際に目で見て肌で感じたからこそ、その違いがより鮮明に感じる事ができたため、この視察研修会を継続することに価値はあると考える。特に、バイエルン州で複数の市を訪問することで、それぞれの市にあるクラブの特徴や内容を規模ごとで比較できることや、日本の都道府県や市町村の人口規模と近いドイツの州や市のことを知ることで、自分の住む日本や山梨県との比較にもつながるため、今後の業務や調査研究に役立つと感じている。

視察研修期間については、複数の市を視察するため、ある程度長期間になることはやむを得ないと感じているが、自身の仕事との兼ね合いから10日前後、長くても2週間以内が妥当ではないだろうか。また、費用についてはどうしても高額になり得ることから、今後も継続させるためには補助金や寄付などの支援があった方が継続しやすく、参加者も参加しやすくなるのではないかと感じている。

今後さらに知りたい内容として、今回の視察研修会で時折話にあった、ドイツで行われる「バッチテスト(体カテストのようなもの)」を体験してみたいとともに、どのように活用されているかをより詳しく知りたいと感じた。日本ではこうした体カテストは地域やクラブで行われることがあるものの、スポーツに興味がある人やもともと運動の習慣がある人が行うものであり、社会的にあまり活用されていないように感じている。特に高齢者に対しては、こうしたテストを行うことで、健康増進のための運動習慣の取得に役立つものではないだろうか。具体的な内容や社会にどう影響があるのかを知りたいと感じた。

第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会報告書

NPO 法人川場村スポーツクラブ 星野千春

第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会に参加させていただき大変ありがとうございました。今回の研修でドイツと日本のスポーツクラブの相違点や共通点、あるいは課題等把握させていただき、気づきや学びを習得することができました。

これからの川場村スポーツクラブの発展に活かしていきたいと思えます。

【1】ドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせる事とは？

①子供から高齢者まで参加できるクラブ教室(多世代参加型教室)の計画立案と実施

ドイツスポーツクラブでは子供から高齢者まで参加できるスポーツ種目や0歳時から参加できるプログラムを実施しており、地域住民の健康増進、生涯スポーツを推進していること、また長期間クラブに所属することにより「クラブ愛」「地元愛」を醸成する姿が伺えました。

川場村スポーツクラブでは事業の柱として会員並びに地域住民向けの「健康教室」や子供向けの「体験スポーツ教室」を実施しております。これは世代別に実施している教室ですが、今後は新たに子供から高齢者まで一緒に活動できる「多世代参加型教室」を計画立案して実施していきたいと思えます。具体的には現在実施している「健康教室」には子供も参加できるように枠を広げること、「体験スポーツ教室」ではモルックのように家族で参加することができ、一緒に楽しむことができる教室を来年度より追加して実施していきたいと思えます。

②若い世代の理事会への参画

ドイツでは10代～20代の若い世代が理事(名誉職)となり、クラブ経営や運営、青少年の育成に関わっています。若い世代の理事を採用する目的として、若い世代の視点、考え方、育成方法、改善点や要望をクラブ経営者へ意見具申し、より良いクラブ経営を目指すことと後継者の育成も推進していると思えます。

川場村スポーツクラブも今後若い理事(子育て世代)を採用してクラブ経営へ参画していただき課題把握や改善点、解決策を共有して若い世代とのつながりも強化していきたいと思えます。来年度からの採用に向けて川場村スポーツクラブ理事長や事務局メンバーとも相談しながら実行していきたいと思えます。また、採用になれば役割分担を明確にして時間的にも負担にならないように考慮しながら協力体制を構築していきたいと思えます。

③スポーツクラブ内レストラン経営(コミュニティの場提供)

ドイツではスポーツクラブ内にレストランが併設されており、会員の皆さんや地域住民が利用されております。スポーツを楽しんだあとのコミュニティの場であり、

たくさんの方がビールを飲み食事を共にしながら楽しそうに会話をしている姿が印象的でした。会員同士、地域住民同士がコミュニケーションをとることで人と人とのつながり、「クラブ愛」「地域愛」が育まれていると感じました。

川場村スポーツクラブでも会員、地域住民にコミュニティの場を提供していきたいと考えます。現時点では施設や財政面でもクラブ単独でレストランを併設することは不可能ですが、行政やスポーツ・文化団体と連携して、地元住民が誰でも利用できるコミュニティの場作りを理事長、事務局メンバーと中長期戦略の中に組み込み、協議することから始めていきたいと思えます。

④小学生・中学生対象の体験型スポーツ教室を増やす

ドイツではクラブチームの規模にもよりますが、1クラブ 14~40 の競技種目があり子供が自分で数ある競技種目の中から自分のやりたい競技種目を選択しています。

生涯スポーツとして楽しむスポーツ、トップアスリートを目指すスポーツもあります。また、他の競技種目を体験することも可能です。

一方、日本、特に地方では少子化が進み、小中学校の統廃合、中学校団体スポーツ部の廃部が進んでおり、今後も少子化スピードは更に加速し団体スポーツの存続も危ぶまれています。そうした状況下では、子供が競技種目を選択することが大変厳しくなります。現在、川場村ではスポーツ少年団が 5 種目（サッカー、野球、テニス、剣道、スキー）、中学校部活動が男子 3 種目（剣道、野球、卓球）・女子 5 種目（剣道、野球、卓球、テニス、バレーボール）です。少子化の影響で今後、さらに種目数減少も危惧されます。

現在、川場村スポーツクラブでは小学生対象「体験スポーツ教室」において、

陸上教室、スキー&スノーボード教室を 1 回/年、実施しておりますが、川場村にない競技種目を追加していきたいと思えます。また、マルチスポーツ体験会を企画・実施して 1 日で数種目のスポーツを体験できるイベントも来年度実施したいと思えます。

「部活動地域展開」では、川場村にない競技種目に関しては近隣市町村と連携して子供たちの選択の幅を広げられるように取り組んでいきたいと思えます。少しでも多くのスポーツ種目を子供たちが体験できる環境作りを強化推進したいと思えます。

⑤子供目線で子供の意見を尊重する姿勢

ニュルンベルクで公園を視察した際、この「公園」は、子供たちの意見を尊重して

子供と大人と一緒に協議をして設計、建設をするというレクチャーを受けました。

「公園」を利用するのは子供たちであり、ある意味、当たり前のことではありますが、日本では大人目線で考えてしまい、子供抜きで大人が中心となり設計、建設をする。冷静に考えるとおかしな話です。

この子供目線で子供の意見を尊重する姿勢こそ大事にしなければいけないことだと改めて実感しました。子供のみならず、高齢者であれば高齢者目線、会員であればお客様目線を大切に。子供を対象にした「スポーツ教室」や「部活動地域展開」、

会員を対象にした「健康教室」や「スポーツジム運営」にも共通することですが、

子供たちや高齢者、会員の考えや意見、要望を尊重して、コミュニケーションを取りながら、スポーツクラブ経営・運営に取り組んでいきたいと思ひます。

【2】プログラム全体として、心に響いて印象に残った事について

今回、ドイツスポーツクラブ視察研修会に参加するにあたり個人的には「地元愛」をテーマに参加させていただきました。

視察したスポーツクラブ「名誉職」や関係者の皆さん、一人ひとりが自分たちのスポーツクラブを愛し、楽しんでいる姿が印象的でした。子供のころからスポーツクラブの会員となり何十年も生涯スポーツとして楽しみ、また青少年育成やクラブ経営・運営に従事している。勿論、無償ボランティアで。

レクチャーをしていただいた「名誉職」の皆さんがプレゼンをしている際、皆さん目が輝いて、クラブ経営・運営の「充実感」、「やりがい」に満ち溢れているように感じました。「充実感」、「やりがい」の要因は、スポーツを通じてスポーツクラブの目的・目標が達成できていること、仲間との絆(ワンチーム体制)が構築できていること、会員の満足度も高く、評価されていることだと思います。勿論、スポーツクラブ自体が地域から評価されていると思ひます。

「クラブ愛」「地元愛」がなければ100年以上も継続して運営することは不可能だと思います。

私が住む「川場村」は3,000人程度の人口で少子高齢化も進んでいる地域ですが、「地域愛」に溢れる住民が多く、地域のことを自分事として考え、取り組み、地域に貢献する人が多く存在します。そんな地域住民が健康で笑顔をたくさん見られるようにスポーツを通じて地域住民の健康増進に努めてまいりたいと思ひます。

今回のドイツスポーツクラブ視察研修会で学んだこと、体験したこと、地元川場村の強みを活かして100年以上継続する「川場村スポーツクラブ」となるように頑張りたいと思ひます。



【 このプログラムは継続した方が良いか？また継続するために必要なこと、補助金などについても要望 】 NPO 法人川場村スポーツクラブ 星野千春

①ドイツスポーツクラブ視察研修会ですが、ぜひ継続実施していただきたいと思います。

②継続実施するために必要なこと

- ・今回 11 日間のスケジュールでしたが、職場や家庭の事情で長期休暇が難しい職員も多いと思います。できれば 7 日間位のスケジュールにしていただきたいと思います。
 - ・教育委員会部活動地域展開担当者や中学校校長、教頭、体育主任の先生にも参加を集ってほしいです。ドイツでは 2026 年度から学校が 16 時までに変わるので、ぜひ見学して意見交換や情報収集をして今後の活動に活かしていただきたいと思います。
 - ・費用の一部を補助金で対応していただければありがたいですね。
- 行政や企業で協賛していただければベストです。



第4回ドイツスポーツクラブ視察研修会 報告書

松澤淳子

1. ドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせる事とは？

【前提としてのドイツと日本の違い】

ドイツの生涯スポーツ振興や地域スポーツクラブの普及は、現地講師の「ドイツは地域スポーツクラブを基礎としてスポーツが築かれている」との指摘の通り、日本とは異なるスポーツ政策やクラブ構築の長い歴史がある。

また、ドイツの社会的背景がスポーツやクラブの普及に大きく影響していることを今回再確認できた。例えば、市民の自治意識の高さ・民主主義の浸透、社会課題(特に移民・難民の多さ)ライフスタイル・価値観(日本より年 400 時間短い労働時間、家族など生活をきわめて重視、スポーツの価値の高さなど)等、日本との違いが多々ある。

なかでも、日本との根本的な違いを2点感じた。「民主主義を最重視」と「移民・難民という社会課題」である。「民主主義」は、過去の反省から持続的な平和と繁栄を実現するために不可欠との共通認識がドイツには強く存在し、それをクラブは体現しているので国民や行政の評価が高いと思われる。「移民・難民」では、地域社会で調和や融合を図る必要があるため、言葉を超えて交流・理解し合えるスポーツが活発に用いられている。

ドイツのスポーツ環境の中から、日本で活かせるものは何か？ ドイツのような精神的支柱や行動の動機づけがあるとは言えない日本。今回、訪問したり教えていただいたりした範囲内ではあるが、3つの対象において、実現可能性に留意してあげてみる。

(1) 子ども・青少年において

(2) 中高年・高齢者において

(3) 行政において

(1) 子ども・青少年において

【最大限体動かす子どもの施設・プログラム】⇒生涯のスポーツ愛好者を増やす基盤！

ドイツでは、運動・スポーツに必要な運動神経や身体づくりを、小さい子どもの頃から意識的に行っているようである。スポーツを楽しむには運動神経・能力が必要で、それがないと上手くできないためスポーツを楽しめない。楽しくないと好きになれないし参加もしない。しかし、子どものうちに、ある程度の運動神経・能力を身につけておけば、様々なスポーツを楽しめるので、一生涯スポーツを愛好する人になりうる。

住宅地に併設された緑地公園内にある子ども向けの屋外運動施設を見学した。このような取り組みがドイツ人を一生涯スポーツ愛好者にしているのではないかと感じた。

「すべての子どもは遊ぶ権利を有する」(国連、児童の権利条約)、「子どもや若者はその発達レベルに応じて、公的な青少年福祉サービスに関するすべての決定に関与すべきだ」(ドイツ社会法典第8巻)を基に、子どもの意見を聞きながら作られた。

この公園には、遊びながら運動能力を最大限高められる遊具が多くあった。例えば、6歳以下の小さな子どもの公園や遊具(写真①)、地面にはふかふかのウッドチップが敷かれ安全に留意されている(ウッドチップは3,4年毎に交換)。やや高度だが楽しめる遊具(写真②)、18歳まで利用可能な各種スポーツ施設がある(写真③)。こうした公園づくりの背景に、子どもをデジタル社会から離そうという意図があるようだ。これは世界共通の重要な課題だが、ドイツは日本より深刻に受け止めていると感じた。

日本でも児童公園をはじめ子どものための公園は多くあるが、設置されている遊具は小規模で軽い運動といったものが多い。他方、ドイツでは「身体を最大限、思い切り動かす」ための様々な遊具が設置されており、発達に応じた運動神経・能力が養われるような配慮がなされている。

施設整備には時間とコストがかかるので、まず、「子どもが遊びながら最大限身体を動かして、発達に応じて運動神経・能力を養う」という考え方の部分が、日本でも活かせるのではないか。

① 6歳まで利用可能な公園の遊具(右は埋め込み式のトランポリン)



② 楽しそうな子どもの遊具 ③ 18歳まで利用可能な公園内のスポーツ施設



【0歳児から通うスポーツクラブ】⇒「第2のファミリー」であり子育て支援にも！

前述の考え方において、スポーツクラブでは何をしているだろうか？ いくつかのクラブで、体育館で行うパルクールを縮小したようなプログラムがあった(写真、一例)。主に就学前の子ども対象で、上ったり下りたり、ころがったり、忍術と称して遊びの要素を取り入れたりする。このようなプログラムは子どもに人気があるそう。年齢の割にハードな遊びになるが、複数指導者が安全面やモチベーションに気を配りながら実施している。子ども達は身体を思い切り動かし夢中になって取り組むので、自然に運動神経・能力や身体機能が養われている。

子どもを対象とする指導者には専門性が必要であり、謝金額も高くなっている。このように、より高度な知識・専門性を有する指導者に限り、子どもを対象にすることができるように規定することは日本でも可能であろう。



3～10歳の子どもには、週1回、毎週異なる様々な種目を体験できる「キンダースポーツシューレ(子どものスポーツ学校)」がある。自分に合ったスポーツを見つけるとともに、子どもの才能を発掘する場にもなっている。

子どものスポーツ学校の中には、主に0歳児が親子で遊ぶ「ベイビーキス」というプログラムもあった(写真)。活動中の撮影は不可であったが、育児休暇中の父親が0歳児と一緒に4,5組は参加していた。母親だけでなく父親も対象にしたこのようなプログラムは、日本のクラブでも間違いなく地域の子育て支援になるだろう。



ドイツの子ども達は、子どもの頃から地域のスポーツクラブで育つので、クラブは「第2のファミリー」だという。こうして大人になっても地域でスポーツやクラブライフを満喫できるのだろう。

【スポーツユエгентによる青少年育成】⇒クラブ役員に青少年を入れる仕組みを！

スポーツユエгентは、日本の少年団のようにスポーツ活動を個々に行う団体ではない。青少年(27歳未満)を立派な社会人にするための活動を行う育成団体がドイツのスポーツユエгентである。そのため教育活動や国際交流なども行われており、誰もがスポーツできる環境づくりを目指して、政治に対して青少年の利益を代弁している。ドイツ16州にそれぞれあるが、バイエルン州ではバイエルン州スポーツ連盟の中にスポーツユエгентがあり、27歳未満の200万人を対象にしている。

ドイツは青少年育成に力を入れている国だ。日本でも青少年の健全育成はスポーツの重要課題だが、日本のように単にスポーツすれば育成になるというスタンスではない。主体性やリーダーシップなど「社会や組織を学ぶ」プログラムがあり、人間性を育て、社会性を身につけることに軸足がある。

クラブ組織はドイツ人が重視する民主主義を体現している。意思決定は総会で行われ、理事は会員による選挙(任期2年)で選ばれる。これは理事をまさに「名誉職」にし理事の評価を高めている。選挙は、投票権をもつ会員の参画意識も高め、クラブの質や持続性を高める重要な仕組みになるのではないか。

だが日本では年功序列などを重視する傾向にあるので、選挙は馴染まなさそう。参考になるのは、理事に青少年枠を設けること。訪問したクラブでは理事が6～7名と日本に比べて少ないにもかかわらず、青少年理事がいるクラブが多かった。青少年理事は青少年委員会の投票で選ばれ、青少年の意見を引き出しクラブに反映させる役割をもつ。

クラブは青少年育成を「非常に大事」と位置づけている。青少年委員と話し合いを持ち、青少年が企画するプロジェクトの実施もしている。日本のクラブでは30代位までの青少年代表理事を設けることがクラブの後継者育成につながる仕組みになりそうだ。

【親が観戦で熱くなるのは万国共通？】⇒クラブが観戦ルールやメッセージを掲示

VfL ニュルンベルク e.V では、サッカー場の出入口脇に大きな掲示がある(写真)。観戦に来た親や大人が、子どもの試合中に熱くなって暴言をはいたり、審判やコーチを批判したりしないことを求めているのである。子どもの試合なのにW杯の試合のように熱くならないでほしいと、ユーモアを交えて表現している。

勝敗でなく楽しむためにスポーツをしていることを強く印象づける掲示。日本のクラブやスポーツ施設でも、積極的にこのような掲示をすると大人は冷静になれるかも。



(2) 中高年・高齢者において

【ボランティアは3人に1人が実施】⇒ボランティアへの感謝表明と社会的評価を！

ドイツでは14歳以上のボランティア参加率が36.7%にのぼる(日本は20歳以上で18%前後、2022年内閣府調査)。スポーツクラブなど団体の理事、消防隊や赤十字、災害救援活動などもボランティアで行われており、社会に不可欠な活動が無償で行うのがボランティアで、それで「名誉職」と呼ばれている面もありそうだ。しかし最近、無償への抵抗感などの理由で、責任ある無償の仕事に就く人が減っているようである(問題だという指摘が複数のクラブであり)。

なぜ無償で理事などの重責を引き受けるかと言えば、「スポーツが好きだから」「やると面白いから」で、感謝や評価を期待していないそう。指導者も資格を取り趣味で教えている。多くある余暇時間を充実させ、より自己実現的な活動をするのがドイツ人にとってのボランティアなのだろう。日本でもボランティアをする理由は同じだが、ドイツでは余暇時間量の多さや「自分達の地域は自分達で良くする」自治意識、キリスト教に基づく人道的な精神、家庭環境、高校卒業までに社会奉仕活動をする仕組み(主にスポーツユースによる)等の背景により、ボランティアが盛んであると思われる。

ドイツのクラブでは、「ボランティアはクラブにとって大切な存在」という気持ちを表現するようにしている。例えば、長年のボランティアを表彰(プレゼント有)したり、食事に招待したりするなど、日頃から感謝の気持ちを届けている。日本でも、無償のボランティア(理事含む)に対して日頃から感謝を表すとともに、特に重責を担うボランティアに対する社会的評価を上げられると参加する人が増えるかもしれない。

ボランティアは全世代対象で地域性もあるが、日本では特に定年前後から定年後の時間

がある人たちの参加が期待できそうだ。これまで社会で培ってきた経験・技能・人脈は地域社会でも活かせる。「社会に役立っている」「必要とされている」という自覚はボランティアする人の健康にも良い影響があるだろう。参加すれば、名刺作成できたり、少額でも謝金が出たり、ポイントが溜まったり、記念品など感謝の印があったりすると、より参加促進になるかもしれない。

【主に中高年以上のリハビリスポーツ】⇒「健康処方箋」による運動で病気介護予防！

ドイツのクラブ訪問中、「リハビリスポーツ」という用語をしばしば聞いた。ランツフート市にある ETSV09 というクラブには、40 年位前からリハビリスポーツが行われ、15 の部がある。例えば、心臓病、糖尿病、癌などに対応した運動・スポーツを行うのだが、医師から健康処方箋がでてリハビリスポーツを指示される。これらは「リハビリ」の名前の通り病中・後のリハビリで、リハビリスポーツの専門指導者がおり医師が同席することもある。

しかし、他のクラブでの「リハビリスポーツ」は、一般成人会員対象に脊柱体操など病気・介護予防的な内容で行われていた。医師の薦めがなくても誰でも参加できるが、専門の教育を受けた指導者がリハビリスポーツを担当している。

ドイツでの「リハビリスポーツ」の定義や範囲は明確にはわからないが、日本で行われている一般的な「健康体操」や「軽運動」に近いプログラムまで含んでいるようである。日本同様、少子高齢化が進むドイツでも、健康によい運動やリハビリスポーツの取り組みは今後一層増えていくようだ。

日本で活かせる事として、内科系の疾病でも医師による「健康処方箋」が出てリハビリスポーツを行うという点である。心臓病、糖尿病、癌などの疾病で、投薬だけでなく「運動も治療」の位置づけであるのは素晴らしいと思った。

日本でも既に存在するかもしれない「健康処方箋」だが、65 歳頃を過ぎたら(できれば 60 歳位から)、病歴・病状や生活状況、身体機能をチェックして、「健康処方箋」がもらえるとよい。病歴・病気のある人は医師の指示のもと、それ以外は専門指導者の処方でもよいだろう。

現在日本では、健康のためにウォーキングを行う高齢者は多いが、ウォーキングに加えて、その人の志向に合った具体的な運動(回数や頻度も)などの指示や推奨スポーツなどの「健康処方箋」があると、効果的な病気・介護予防になると思われる。専門指導者のいる地域のスポーツクラブで、それらの処方や運動・スポーツをできたらいいのではないか。飽きないように、処方箋を定期的に見直したり効果を測定したりすることで継続を促すとよい。

(3) 行政において

【行政等による手厚いサポート】⇒基盤となる各種財政支援やサポート担当の存在

ドイツ市民のスポーツ振興は、スポーツクラブ支援をすることで実現されていると言っても過

言ではない。バイエルン州ニュルンベルク市には、200 のクラブ、11 万人の会員がいる。

同市のスポーツクラブに対する補助金例を挙げてみよう。クラブ運営費補助金(2022 年)は 1,437,300€(2 億 5,871 万円 1€=180 円)、そのうち施設維持のための補助金が最も多く 61%(1 億 5,660 万円)を占めている。次いで指導者への補助金が 27%(7,020 万円)。また、投資的な補助金として、新しい施設建設や設備設営に 1,100,000€(1 億 9,800 万円)の予算がある。クラブが新しい施設を作る場合、経費のうち市から 45%、州から 20%(来年から 25%)、合計 65%の補助金を得ることができる。その他、プールなど公共施設の使用料優遇、学校体育施設利用優遇、存続のための費用(コンサルタント費、合併費用等)、優秀なスポーツ選手支援、子どもの会費支援、難民受け入れの補助金など、「クラブが困っている時に放置しない」との市職員の言葉通りかなり手厚い。しかし市の財政は厳しく、これらの補助金が増加傾向にあるわけではない。

補助金対象になる条件は、市民のための団体であること、会員がニュルンベルク市民であること(50%以上在住)、会員の 20%以上が 26 歳以下の青少年であること、少なくとも会費を支払うこと、である。担当者によれば「大事なことは長期的な視点」とのこと。

補助金以外の行政支援もある。例えば、子どもが増加中のため新たに学校体育施設をつくっているが、学校が使用していない時にクラブが使用可能という。ニュルンベルク市スポーツ協会では、助言や補助金申請等のサポート、青少年指導者育成等をしている。ランツフート市には、市長直属のスポーツ担当官が 1 名おり、クラブが相談に行けば関連する部署につないでくれるなど、クラブに喜ばれている。

ドイツではクラブが公共財のようなものなので施設補助もされているが、日本では、存続のための人的支援や行政内部署の橋渡しなどが支援の参考になるだろう。

【スポーツ指導有資格者への補助金】⇒地域スポーツ人材に補助、医療介護費削減へ！

大規模クラブの事務局には月給制の職員が 1~数名いるが、それ以外のクラブは、ほぼボランティアで運営されている。ボランティアと言っても、約 120 時間の養成を受け資格を保有する指導者には、資格取得後、州・市からの補助金が出るので、クラブは時間単位で指導者に謝金を払っていることが多い。

ランツフート市の大規模クラブ(会員 6,200 人)では、種目の各部から推薦された人の資格取得時の受講料をクラブが出している。少なくとも 3 年以上クラブで指導するといった条件で指導人材の確保にもつながり、上手くいっているとのことだ。指導者はクラブの会員でもある。

補助金額や実際に指導者に支払う額は、州・市、クラブによって異なる(支払いは、補助金額にプラスもあればマイナスもある)。バイエルン州ニュルンベルク市では、一般的な有資格指導者には 8€/時間(1,440 円 1€=180 円)で、年 640€(115,200 円 年 80 時間)を支払うが、そのうち補助金が 600€(108,000 円)、クラブは 40€(7,200 円)もつ。ちなみに子ども対象

や水泳の指導者は養成時間が長く謝金も高め(※)。子ども会員や生活困難の会費は行政が支援しているようだ。

日本の大きな社会課題である医療介護費をある程度抑制するために、身近な地域で行う運動・スポーツ活動をより活発にすることが重要だ。そこで、ある程度の基準を満たした有資格スポーツ人材に補助金が出るとクラブの質向上につながり、持続的なクラブ運営にも役立ちそうだ。補助の仕組みがあると、クラブの会員の中から年齢問わず適切な人を指導者として育成しやすくなるというメリットもある。

(※)あるクラブの会長は、「謝金をもらっていても、それで生活しているわけではなく税法上の基準以下なので、『名誉職』である」と話していた。年 3,000€(54 万円 1€=180 円)までは毎年の税申告をしなくてよいそうだ。

2. プログラム全体として、心に響いて印象に残った事について

1で書いた内容も印象に残った事であるので、上記以外について、ここに記述する。

【魅力的な施設、施設＝投資】

今回訪問した会員 1,000 人を超える大規模クラブの活動拠点は、市などの公共施設で賃料＋光熱費を払っていることが多かった。土地はクラブ所有で建物は市のもの、あるいは土地は市のもので建物はクラブが作り所有しているクラブもあった。施設不足で学校施設を借りているクラブは賃料を市に払う。クラブの多くは自己所有の施設は持たず、近くの学校など公的な施設を借りてクラブを運営しているとのこと。



どのスポーツ施設、クラブハウスもメンテナンスや清掃が行き届き、綺麗な状態に保たれている上に、色づかいなどのデザイン性も加味されて、利用したくなる魅力的な施設になっていた。

スポーツ施設やクラブの存在が、環境に負荷を与えないよう配慮していることを出入口付近に掲示しているクラブ(ミュンヘン市)もあった(写真)。

ニュルンベルク市のスポーツ振興の話の中で、施設維持の予算のことを「投資」と表現していたことが印象に残っている。2022年度、約2億円が予算化され、州からの補助金を合わせて、既存施設維持のための修繕等に補助金が出る(1の(3)参照)。

ドイツのスポーツ政策は日本よりも施設を重視していることは知っていたが、訪問中、何度も「やはりドイツの施設は素敵だなあ」と実感した。人々は魅力的なスポーツ施設や居心地のよいクラブハウスに集まってくるのである。



【日本のスポーツクラブと同様の問題点・課題】

ランツフト市にある会員1,400人のクラブでは、毎年150~300人ほど退会し、その代わり新規入会があるので、会員数全体は増加傾向とのこと。ドイツのクラブは子ども時代から長期間継続している会員がほとんどだと思っていたが、退会者も1~2割おり、その点は日本と変わらない。

同クラブの問題点・課題として、「指導者・コーチの獲得」「お役所仕事(申請書作成等)を減らす」「デジタル化」「理事等責任者になってくれる人がいない」「堅固な財政」が挙がっており、日本と大きな差はないという印象であった。

ドイツの全日制学校(授業終了後の13~16時、教員のもと子どもを学校に滞在させる制度。あくまで自発的なもの)は、2026~2027年度から段階的にドイツの学校で導入される。「学校とスポーツクラブが協力し、全日制の子ども達のスポーツ活動を促進する」ことがスポーツユースで現在検討されているとのこと。

部活動がなかったドイツで、学校という拠点をもっと活用して子ども達のスポーツ活動を実施するという方向にドイツは向かっている。ドイツの全日制学校では学校の管理・責任のもとクラブが協力する形になりそうであり、部活動地域展開のように地域に軸足を置くことを目指す日本とはその点が違いそうだ。

学校とスポーツクラブがどのように協力して、子どものスポーツ活動を実施できるかは、これまで学校に協力的な日本の総合型地域スポーツクラブが行ってきた経験・方法があるが、まず大事なことは学校文化を理解することかもしれない。

全日制学校に関するドイツの資料には、コンセプトとして「放課後のケアと保護者の負担軽減に重点を置く」とあり、おそらくドイツでの共働き増加がこの制度を推進する背景にあるのだろう。教員の負担増については特に明記されていなかった。

【スポーツの価値は交流・仲間づくりに深く関係】

大変お世話になったニュルンベルク市スポーツユース教育担当のミハエル・フォス氏の言葉を借りれば、「スポーツは人々の生活にとって大切なもの。スポーツして笑って、仲良くなる。スポーツクラブの食堂でご飯を食べて、飲んで、笑う」。多くのドイツ人にとってスポーツは、生活を豊かにする価値の高いものの1つなのだ。冒頭にも書いたが、移民・難民の多いドイツでは、言葉がなくても通じ合えるスポーツが不可欠であり、地域に融和をもたらしている。

ランツフート地区スポーツユース本部長のステファン・ワーナー氏からは、「子ども・青少年達に、『スポーツをすると楽しい』とわかってもらうように、プログラムやお出かけなどのイベントづくりをしている」との話があった。元々ドイツ人はスポーツ好きばかりと思っていたが、ドイツの子ども達がスポーツを好きになり、生涯にわたってスポーツの価値を高める、その環境づくりをスポーツユースやスポーツクラブが日々工夫・努力して行っているのだとわかり、印象に残った。

最後になるが、プログラム全体で、特に心に響いたこと。

様々な方々が分担・協力して綿密なスケジュールを組んでくれたり、現地では全力でおもてなしをしてくれたりしたことに、言葉にならない程、感謝の気持ちでいっぱい、思い出すたびに温かい気持ちになる。「全力のおもてなし」を見習いたいと思う。



・ドイツのスポーツ環境を学んで地元を活かせる事とは。

どんぐり財団 圓山昌之介

今回の研修を通してドイツのスポーツクラブと、日本のクラブとでは似ている部分もあるが、そうではない部分もあり、ドイツの形を日本に落とし込めるところ、そうではないところの見極めをする必要があると強く感じた。

ドイツが進んでいるのか、日本が遅れているかは国のスポーツに対する考え方が違う可能性があるため簡単には分からないが、スポーツにかかわるものとすればうらやましい環境であった。

その中でドイツのスポーツ環境は自治体からの支援がしっかり入っており、住民がスポーツをする環境づくりが整っていると感じた。また、クラブに対する考え方や成り立ちが日本とは違い、もともと地域にあったクラブをより強固にしていくために行政と、住民が今の形を作りだしていると伺った。このドイツのクラブ文化は何か競技をするためにそのクラブに入るのではなく、そのクラブの理念に賛成してクラブに加入するものとのことで、コロナの時期などもスポーツメニューの提供ができない時期に、スポーツメニューが提供されないことによる退会はあるクラブではほとんどないことだった。

この事実が日本のクラブにとって参考にすべきことではないかと強く感じた。

ドイツのクラブに対する助成金の出し方として州や市によって違いはあるようではあるが、下記のような支援があるとのことだった。

●補助金の対象条件

市からの支援を受けるためには以下の条件を満たす必要があります：

- ・非営利のスポーツクラブであること
- ・会員の 50%以上がニュルンベルク市民であること
- ・会員の 20%以上が 26 歳以下の青少年であること
- ・適切な会費制度を設けていること

直接的な補助金制度

運営費補助金(最大の支援項目)

- ・施設維持費: 独自のスポーツ施設を運営するクラブへの暖房費等の支援
- ・指導者補助金: 資格のある指導者を雇用するクラブへの支援
- ・青少年補助金: 青少年会員が多いクラブへの追加支援

補助金の対象条件をこのように設けている背景にはやはりクラブを存続するためには条件のような内容が必要になってくるという内容なのではないかと感じている。

ドイツでは指導者登録する際に120時間の研修を必須としており、幼児の指導をする際はさらに別の資格も必要になるとのことだった。

このようにドイツのクラブに関する考え方は青少年や、指導者に対してしっかりと向けられていた。

今回の研修ではドイツのクラブの現状などを聞き、先進地ではあるが、スポーツクラブとして完全に自立している民間クラブのようなイメージでなく、行政と密に連携しながら、地域にとってなくてはならない存在であるため、補助金なども投入し、存続に向けて協力しているように感じた。

この研修を受けて地元を活かせる事は、ドイツの形をそのまま真似をして実施していうことは現実的ではないが、地域にとって必要な存在であることを示すことでクラブの継続や、行政からの支援につなげることができると感じた。地域にとって必要なクラブとは何なのか、再度検討し、地域の子どもをみんなで育てるや、誰でもスポーツのできる環境づくりを目指すなど、再度総合型地域スポーツクラブのあり方について検討し、考えなす時期に来ているのではないかと感じた。

今、日本で起こっている部活動の地域展開などにも直結し、地域の子どもの受け皿を作るためには総合型地域スポーツクラブの力は不可欠で、指導者不足の問題なども、ドイツの形を参考にした場合、指導者はボランティアと表現はされていたが、報酬として1時間1,500円以上は渡されており、0円で指導を任せることはなかった。このことから指導者への報酬は当たり前前に発生し、ボランティアの意味は指導者の専門職ではなく、空いた時間にクラブの理念に賛成して指導しているという意味でのボランティアと表現されていた。無料で指導をさせること自体発想からないとのことで、クラブの会長などは無給のクラブがほとんどであったが、指導者が無給のクラブは今回伺ったクラブにはなかった。

クラブ運営の中でも、毎年の支出の人件費の占める割合は施設使用料などを入れても一番高くなっていた。

クラブで存続について大切なだと思ふことを聞いたとき、常に会員と、指導者の確保については重要と答えられており、当たり前ではあるが、会員と指導者なしではクラブの存続はないと回答があった。

ドイツでは会員は顧客ではなく、クラブの理念に共感した仲間の意識が高く、クラブハウスで食事をしながら様々な話をするなど、常に誰かが交流している風景があった。日本のスポーツクラブはコースの提供を受けて帰るパターンが圧倒的に多いのではないかと感じている。それが国民性なのかもしれないが、すごく人間味がありうらやましくも感じた。

これらを踏まえてドイツから学べることは、クラブの理念を会員に理解してもらい、クラブの存続を会員とともに考えることのできる組織作りが必要なのではないかと感じた。

それは会費についての理解なども影響してくると考えられる。部活動展開が加速し、地域の子どもは地域で見守る環境を作るときに、指導者を整えることは非常に重要なことになり、それにはお金が不可欠になるが、既存の会費から上げた場合なども理解してもらえるのかなど、今後のクラブ運営を理解してもらえる仲間を作っていくことが大切になると感じた。

・プログラム全体として心に響いて印象に残ったことについて。

プログラム全体を通して印象に残ったことはクラブ訪問全般になる。

クラブごとに特徴があり、バイエルン州や、ニュルンベルク市のスポーツ協会の話や、話を聞ける機会はとてもありがたかったと思う。

一方向の話聞くのではなく、行政と、クラブの双方の話聞くことで、より強くつながり双方を尊重しながら、クラブを運営されていることをじかに感じる事ができたため、今回の研修の中で、双方から話を聞ける機会はとてもありがたかった。



【多くのドイツの仲間へ感謝】

今年もたくさんの方々の協力により充実した研修会になった。

今年、訪独する直前にニュルンベルク市・ミュンヘン市のスポーツ指導者が新町と岐阜へ視察研修のために来日しました。その準備と重なり、私の準備が遅れてしまいギリギリで準備したこともあり、参加者の皆さんにご迷惑をおかけした。準備不足を自覚していたことから少し不安を抱えての出発となった。

おそらく、私たちを受入れてくれたドイツのみなさんも同じで、帰国後直ぐに私たちの受入となったので大変だったと思う。

ミュンヘン空港へ早朝にもかかわらず迎えに来てくれて案内してくれたオンダーさん。ランツフート市との連絡調整を含めてプログラム全体を調整し、今回はホテルの予約等も対応してくれたニュルンベルク市のミハエルさん。国際交流担当理事として対応してくれたドリスさん、ニュルンベルク市スポーツ連盟会長として対応してくれたコニさん。そして、初めて私たちを受入れてくれたランツフート市のシュテファンさん、マリオさん。ニュルンベルク市でレクチャーをしてくれたマークさん、ボートクラブで視察を受入れてくれたヨハネスさん、ニュルンベルクスポーツユースクラブ副本部長として受け入れてくれたナターシャさんとたくさんの方々の支えがあって充実したプログラムになった。

そして、なによりも毎回お世話になっている通訳の高橋範子さん。高橋さんの存在無くしてこの視察研修会は成り立たない。

【ドイツスポーツクラブ視察研修会の目的と沿革】

ドイツスポーツクラブ視察研修会は、以前、日本スポーツ協会として実施していた海外研修会がスポーツ振興くじの助成が無くなり、なおかつ、日本スポーツ協会の事務局体制として開催する事が困難になり総合型地域スポーツクラブ(以下、総合型クラブと称する)関係者がドイツを訪問して視察研修を行う機会を失ってしまった。全国の総合型クラブ関係者の要望の声に後押しされ、小出が持っているドイツの人脈を活用して総合型クラブ関係者中心に総合型クラブの手本となっているドイツにおけるスポーツクラブ活動並びにドイツ各州におけるスポーツ行政について学ぶ機会を創出することを目的として開催することになった。

2017年にプレ視察研修会としてフライブルク市とニュルンベルク市を視察研修を初めてから2018年(メルフェルデン=ヴァルドルフ市・ニュルンベルク市)、2019年(フランクフルト市・デュースブルク市中心)を視察訪問させていただき、2020年からコロナ禍のために4年間中止を余儀なくされた。2024年(ホイヘルハイム・ニュルンベルク市)視察訪問から再開となって今年もミュンヘン市、ランツフート市、ニュルンベルク市において視察研修会開催することができ

た。この視察研修会のプログラム調整は、主にドイツ在住の高橋範子さんと小出が連絡調整を行い、今年はニュルンベルク市のミハエル氏を中心に行った。

【毎回新しい学びがある視察研修会】

今回の訪問地、ミュンヘン市、ランツフート市は初めて視察訪問した。また、2026年9月からバイエルン州の学校が16時まで生徒が学校にいる権利を与える(ドイツではこれを全日制と呼ぶ)法律改正が予定されている。学校部活動を地域展開することを政策として進めている日本と学校に長い時間滞在している権利を与えるバイエルン州の人達で互いに意見交換できる機会になったことは双方にとって有意義な時間となった。

ミュンヘン工科大学において受けたレクチャーでは、「Ganztag(全日制)」について、学校の正式な授業は13時までとして、地域が協力して16時まで学校でも対応できるように行うことについて詳細にレクチャーを受けた。生徒が「自由参加タイプ」と「必須参加タイプ」のプログラムを用意して生徒へ選択権を与えるという考え方(詳細は、別添資料参照)を聞いて、日本学校部活動地域展開についてもこのような考え方があって良いのではないかと思った。

こども基本法の「こどもの意見表見権」と照らし合わせて、私はこのような考え方はとても納得ができてしっくりした。

ランツフート市は人口約75,000人の古くはバイエルン州の州都の歴史があり市役所も歴史の長さ、深さを感じた。ランツフートの結婚式という歴史ある物語が描かれている市役所内のホールで市長へ表敬訪問できたことはとても光栄だった。ランツフート市の人口の半数以上の約36,000人がスポーツクラブ会員ということで複数のスポーツクラブはどれも会員数が多く活動がとても活発に行われていた。その中で、スポーツクラブ内の各種目では対外試合を目的としないことを明確にして活動していた。まさに「みんなのスポーツ」を地域全体で取り組んでいた。ドイツにおける「スポーツ文化」を感じる話であった。

また、土地を地域が提供して建物は市が建設したクラブ施設と土地は市が提供して施設はクラブが建設した2パターンがあった。市の建物をクラブが使用する場合、賃借料と光熱水量をクラブが市へ支払う方式となっているが、本来支払う金額の25%程度を支払うだけになっている。つまり、市行政としてクラブが市として必要な組織であり大切にしなければならない意識になっていると感じた。市民の半数以上がスポーツクラブ会員というスケールが行政として重要視しなければならないのかもしれない。

修道院に併設された学校(日本流のいい方では私学)では校長からレクチャーを受けた。そのなかで、移民の生徒に対しては1年間徹底したドイツ語教育を施してから進級させていた。ドイツにおける移民難民政策は、複雑ではあるが必要なことを明確にして具体的に動いている。

ニュルンベルク市の現地視察では、子どもたちが遊ぶ公園内に大人が身体を鍛えることができる器具が設置され、新しい集合住宅を建設する場合は公園を設置することになっている

として、設置された公園を視察したが、遊具がどれも日本では考えられない子どもたちの好奇心をくすぐり、挑戦する心を育むようになっていることを改めて感じた。日本は、大人主導で行政も行動することから子どもたちの調整する心を育む公園はほとんどなくなりつつあることから大人として大いに反省するべき点だと痛感した。また、今回は移民難民に対するスポーツ政策についても詳細に聴くことができた。

【プログラムにある観光の要素】

今回のドイツスポーツクラブ視察研修会は、全ての都市がクリスマスマーケットを開催していた。やはり、本場ドイツのクリスマスマーケットはキリスト教としての宗教的要素があり、どこか厳かでありながら早い時間から暗くなるドイツの冬をみんなで楽しむ機会となっていた。

ランツフート市もニュルンベルク市もクリスマスマーケット会場内に「子どものクリスマスマーケット」会場があり、ここでも子どもたちを中心にする姿勢を感じた。

ミュンヘン市のニッフェンブルク城、アリアンツアリーナ(バイエルンミュンヘンの本拠地)、ランツフート市の市街地散策、ランツフート市の高台にある城、ニュルンベルク旧市街地とたくさんの歴史ある街並みも歩いた。こうした観光政策についても、日本の観光政策との違いを感じつつ、連日のレクチャーの疲れを癒す効果を期待してプログラムに組み込んでいる。

【企画・引率者としておわりに】

このドイツスポーツクラブ視察研修会は、お陰様で毎回参加者からは好評である。これは、高橋範子さんの支援、ニュルンベルク市大切な仲間の支援をはじめとしたドイツ各地にいる友人たちの支援があって成り立っている。そのことを感謝して最初にお礼を申し上げたい。

しかし、昨今の円安、エネルギー価格の高騰から航空券代が高止まりし参加費が高くなり、また、ドイツ国内での消費行動には円安(今年の8月は1€=160円が今回は1€=190円)が大きく影響した。本当は、もっと参加費を安価に設定できて誰もが参加しやすい研修会としたいのですが、それができないことが大変心苦しいと悔しい。

この事業を継続して欲しいという声をたくさんいただいて感謝しているが、どのように継続すべきか常に悩んでいる。個人の力で成り立っている(高橋範子さんの支援と小出の人脈)がこの方法では必ず限界が来ることは明白であることから良い方法がないか常に模索して大きな悩みである。そして、クラブマネジメント人材育成の重要性を理解してくれる企業団体を見出して、財政的な支援があって参加費を少しでも安価にしたいと強く願っている。

私も来年は68歳になる。この事業の重要性を一番理解しているがいつまで継続できるか不安である。それでも、続けられる限り続けるしかないと感じている。

この報告書読んだ人たちで支援していただける企業団体を紹介していただける人がいたら是非、声をかけて欲しい。

来年もドイツスポーツクラブ視察研修会が実施できることを願って報告を終わる。

ミュンヘン工科大学

本会議では、バイエルンスポーツユース(Bayerische Sportjugend)の組織構造と活動内容について詳細な説明が行われました。

話者 4 が主導し、バイエルンスポーツユースがバイエルン州のスポーツ青少年組織であり、27 歳までの約 200 万人の若者を対象としていることを説明しました。組織は 8 つの地区と 57 の種目別競技団体で構成され、350 の異なるスポーツ種目をカバーしています。

組織の主要な活動領域として、青少年政策、フライビリゲンディンスト(社会奉仕活動)、教育活動、国際青少年交流、補助金プログラムの運営が挙げられました。

特に注目すべき点として、2026 年から 2027 年度にかけて実施される学校制度の改革(ガンツターク制度)について詳しい説明がありました。この新制度では、従来の午前中だけの授業から全日制へと移行し、スポーツクラブが午後のプログラムに積極的に関与することが期待されています。

チャプター

バイエルンスポーツユースの概要 00:00:00

組織の基本構造と目的について説明。27 歳までの青少年を対象とし、約 200 万人のメンバーを持つ州最大の青少年スポーツ組織であることが示されました。

組織構造と活動内容00:06:13

8 つの地区と 57 の種目別競技団体の構成、350 のスポーツ種目の提供について詳細な説明がありました。

教育システムと将来の改革 00:14:41

ドイツの教育システムの説明と、2026 年から導入されるガンツターク(全日制)システムについての詳細な説明が行われました。

行動項目

バイエルンスポーツユース:ガンツターク制度への対応コンセプトの作成 00:21:50

スポーツクラブ:午後のプログラム実施計画の策定 00:22:24

指導者養成プログラムの開発と実施 00:22:49

全日制システムにおけるスポーツ活動の実施計画の策定 00:23:04

Veldener StraBe3

会議では主に広報活動とプライバシー保護に関する議論が行われました。

最初に、子供やシニア向けの活動の宣伝について話し合いが行われ、話者 3 が広報活動の時期に関する質問を提起しました。特に、指定された期間外での宣伝活動が許可されているかどうかについて確認がありました。

続いて、写真使用に関する重要なプライバシー保護の議論が展開されました。話者 1 と話者 2 が中心となり、特に子供の写真の取り扱いについて詳細な注意事項が共有されました。子供の写真をインターネットや新聞、ポスターに掲載する際には保護者の許可が必要であることが強調されました。

最後に、写真撮影の具体的な制限について説明があり、上から撮影して顔が識別できない写真は許可される可能性があるものの、子供が特定できる場合には使用できないことが確認されました。

チャプター

広報活動の時期に関する議論 00:00:03

広報活動の実施時期について質問が提起され、特定の期間に限定されないことが確認されました。話者 3 が学校の部活動での募集時期との類似性を指摘し、議論が展開されました。

写真使用とプライバシー保護の指針 00:01:32

子供の写真使用に関する厳格なガイドラインについて詳細な説明がありました。特に、インターネットや印刷物での写真使用には保護者の同意が必要であり、個人が特定できる写真の使用は避けるべきことが強調されました。

行動項目

話者 1: 子供の写真使用に関する保護者の許可を取得する手続きを確立すること。

話者 2: 写真撮影時の具体的なガイドラインを作成し、特に上からの撮影など個人特定を避ける方法を明確化すること。

話者 2: クラブの財政状況について次回の議題として準備すること。

ランツフト VFL

このトランスクリプトは、あるスポーツクラブの活動内容、運営方針、組織体制、会員状況、および年間を通じて行われるイベントについて詳細に説明しています。

主な焦点とクラブの理念

- **メイングループの活動:** このクラブは、月曜日から日曜日まで毎日活動する大規模なグループを持っています。
- **若年層の課題:** 15 歳から 28 歳の参加者が非常に少ないという課題を抱えています。これは、この年齢層が好むサッカーやハンドボールのようなチーム球技プログラムの提供が不足しており、若者が他のクラブへ流出しているためです。
- **クラブの方針:** 競技スポーツや試合ではなく、ドイツ語で「フライツァイトシュポルト」と呼ばれる「余暇スポーツ」に重点を置いています。体育館の利用状況も考慮し、多くの人に参加できるプログラムを重視しています。

提供されているスポーツプログラム

- **フィットネスプログラム:** マシンを使用しない体操のような形態のフィットネスが充実しています。
- **武道:** 合気道(週 2 回)、空手(現在は成人のみ参加)が提供されています。
- **球技:**
 - バドミントン(週複数回、初心者から上級者まで対応し、スピーカー自身もトレーナーを務める)。
 - バスケットボール(楽しむことに重点)。
 - クリケット(屋外の小さなフィールドで実施)。
 - ケーゲル(9 ピンボウリングに似た種目)。
 - バレーボール(最年長 85 歳まで幅広い年齢層が参加)。
- **子供向けプログラム:**
 - キッズスポーツ(ジャンプや様々な運動を通じて、ドイツの体力テストも実施)。
 - 子供向け陸上競技。
 - フラッグフットボール(4 歳から 9 歳向け、その後はアメリカンフットボールへ移行)。
- **その他のユニークな活動:**
 - **アーチェリー:** 室内での練習から始まり、4km 離れた森の射場にある動物の的を使った実践的な練習まで行います。これは趣味としての活動です。
 - **ダンス:** ラインダンスやスクエアダンスのほか、子供たちがカーニバルのパレードに参加する活動もあります。
 - **パルクール/トラクール:** 室内で行う「トラクール」と、屋外で自然の障害物を利用して飛び越えたりぶら下がったりする「パルクール」があります。これは「ニンジャ・ウォリアー」のような要素を取り入れています。

- テニス: 3面のコートがあり、室内と屋外の両方で楽しめます。
- 健康とリハビリ: 気功(成人の精神的な健康のため)や、専門のコーチが指導するリハビリテーションスポーツ(医師の診断書なしに誰でも参加可能)が提供されています。
- サーキットトレーニング: 特定の動きを行うステーションを巡回するトレーニング。
- ヨガ: 週に多くのセッションが開催されています。

クラブの運営と組織体制

- 理事会: 会長、2名の副会長、財政担当理事(シルビア氏)、書記、スポーツ担当理事、広報担当で構成されています。
- 財務管理: 財務管理官2名が年に1~2回、内部監査としてクラブの会計をチェックしています。
- 役割: 理事会は、クラブと会員をつなぐパイプ役であり、市との交渉、スポーツ活動の運営、指導者との連携、財政管理など、幅広い事務処理と業務を担当しています。広報担当者は写真撮影や地方新聞への記事執筆も行っています。

会員状況とコロナ禍の影響

- 会員数推移: 毎年約10%の新規会員と約10%の退会者があり、年間150~300人の入れ替わりが見られます。
- コロナ禍への対応: プログラムの性質上、人との接触が激しくないものが多いため、コロナ禍でも活動を中止する必要がなく、大きな影響は受けませんでした。
- 会員数の成長: コロナ禍にもかかわらず、会員数は2020年の1,100人から2023年には1,400人へと増加しており、全体として成長傾向にあります。会員管理は2名のスタッフが行っています。

年間イベントとコミュニティ活動

- 交流イベント: 3~4ヶ月に1回程度、子供や孫世代を対象とした交流イベントが開催されます。
- カーニバル: 毎年恒例のイベントで、仮装した大人と子供がスポーツゲームなどを楽しめます。2025年には約400人が参加しました。2年に1回は街中でパレードに参加しますが、バイエルン州では他の地域ほど盛んではありません。
- ハロウィン: 新しいスポーツシーズン(9月)の始まりを祝うイベントとして開催され、約300人の子供と大人が参加します。
- クリスマスパティー: 学期末、夏休みが始まる前(バイエルン州では7月末から8月初旬)に開催されます。

スポーツシーズン

- クラブのスポーツ活動シーズンは、学校の学期に合わせて9月から7月までです。8月は夏休み期間となります。

ランツフート 修道院学校

この会議では、ドイツの学校システム、特に全日制学校(Ganztagsschule)について詳細な議論が行われました。

話者 1 と話者 2 は、8 時から 16 時までの全日制学校システムについて説明を交わしました。全日制学校では、教師が生徒の面倒を見て、保護者は給食費のみを支払う必要があります。

しかし、全ての保護者がこのシステムを望んでいるわけではありません。その理由として、自分で子どもの教育をしたいという保護者の意向や、子どもへの負担が大きいことが挙げられました。

2016 年からは、行政が 3 つの選択肢を提供することになります：

- ・ホルト(青少年局管轄、16 時または 17 時まで)
- ・給食サービス(青少年局管轄)
- ・全日制学校(学校局管轄)

これらのサービスについて、生徒たちは参加する権利を持ちますが、参加は任意です。また、スポーツクラブと学校の連携による放課後活動の提供も検討されています。

●ドイツの全日制学校システムの概要

全日制学校システムは 8 時から 16 時まで運営され、教師が生徒の指導にあたります。保護者は給食費のみを負担する必要があります。しかし、全ての生徒が参加できるわけではなく、定員や保護者の意向により制限があります。

●保護者の懸念事項

多くの保護者が自身で子どもの教育を行いたいと考えています。また、子どもへの負担が大きいことも懸念されています。通常の学校の生徒は、下校後に宿題をしたり遊んだりする時間があります。

●2016 年からの新制度

行政が提供する 3 つのケア選択肢(ホルト、給食サービス、全日制学校)について説明がありました。これらは各々異なる部署が管轄し、生徒たちは参加する権利を持ちます。

●行動項目

- ・行政は 2016 年秋までに 3 つのケアサービスを整備する必要がある

[00:05:09](#)

・スポーツクラブと学校の連携による放課後活動の提供を検討 [00:06:23](#)

・各参加者による自己紹介の実施 [00:09:02](#)

ランツフト TGL5

このトランスクリプトは、ドイツのランツフト市にあるスポーツクラブの運営、組織、財政、活動内容、および指導者育成について詳細に説明しています。

主要なテーマ

- ・ 地域に根ざした大規模スポーツクラブの運営モデル
- ・ 民主的な組織運営とボランティアの重要性
- ・ 多様な収入源と財政基盤
- ・ 地域社会のニーズに応えるプログラム(特に青少年と健康増進)
- ・ 質の高い指導者育成とその支援体制

主要な内容

1. クラブの活動場所と施設

- ・ **主な活動拠点:** ランツフト市の「西スポーツセンター」を借りて使用。
- ・ **施設内容:** 体育館 10 個、屋外施設。
- ・ **追加施設:** 十分な施設がないため、学校の体育館(例: シュルケボーデン、ケフェーニャ、スタッキ)も活用。学校の体育館は毎週 100 時間のスポーツ活動に使用され、クラブの活動にとって非常に重要。

2. クラブの規模と位置づけ

- ・ バイエルン州スポーツ連盟の順位表において、当クラブはバイエルン市(ランツフト市を指す可能性が高い)最大のスポーツクラブ。
- ・ 世界最大のサッカークラブである FC バイエルンと比較し、会員数 30 万人以上(活動しないファンも含む)の規模に触れる。

3. クラブの組織構造

- ・ **意思決定機関:**
 - **総会:** 最も重要な民主的機関。年次報告、最近の動向に関する情報提供、理事会の選挙を実施。

- **運営・代表機関:**
 - **理事会:** クラブの運営と外部への代表(契約締結など)を担う。
 - **構成:** 会長、第 2・第 3 副会長、会計部、財務部、スポーツ担当理事、書記、青少年指導者(意見がクラブに反映される重要職)の 7 名。
- **委員会:**
 - **クラブ委員会:** 理事会と年 4 回会議を開催し、様々なテーマについて話し合い、クラブ員とのコミュニケーションを促進。
 - **青少年委員会:** 全 25 の部から選出された青少年代表者で構成。青少年プロジェクトの計画・実施を担う。将来の指導者育成の観点から非常に重要。
- **スタッフ体制:**
 - 青少年代表者や各部の部長(25 名)は全て名誉職(無給)で活動。
 - クラブの規模から、専任職員も必要。常勤 2 名、非常勤 2 名の計 4 名が事務局で勤務。

4. クラブの財政

- **年間予算:** 150 万ユーロ。収支計算を行い、常に均衡を目指す。
- **主な収入源:**
 - **会費:** 最も重要な収入源。
 - 成人(18 歳以上): 月 16 ユーロ
 - 青少年(14~17 歳): 月 13 ユーロ
 - 児童(14 歳まで): 月 9.50 ユーロ
 - 会費を支払うことで全ての部や種目に参加可能。
 - **補助金:** バイエルン州からの補助金。
 - 決定基準: 会員数、ライセンスを持つ指導者数、子ども・青少年の会員割合など。
 - **コース形式プログラム:**
 - 会員以外も有料で参加可能(会員は割引料金)。健康促進運動、予防運動、ベビーコースなど。
 - 目的: 参加者にクラブの活動を体験してもらい、会員獲得につなげる。
 - 市の職員向けの健康コースなど、外部向けプログラムも実施。
 - **施設貸し:** 空いている体育館を他のスポーツクラブに貸し出すことで使用料を得る。
- **主な支出:**
 - 施設の家賃(市へ支払う)。
 - スポーツ活動に関する費用(参加料など)。
 - チーム移動用のマイクロバス 5 台の維持費。
 - コーチ・指導者への手当。
 - スポーツ器具費用。
 - 事務局職員の人件費。

- 年末に予算が余った場合、各部の要望(新しい器具購入、プログラム提供など)に応じて支出。

5. 主要なプログラム

- **キンダーシュポルトシューレ(子どもスポーツ学校):**
 - 3歳から10歳までの子どもを対象としたカリキュラムのある学校形式のプログラム。
 - 目的: 様々なスポーツ(陸上競技、ホッケー、ハンドボールなど)を体験させ、子どもに合った楽しいスポーツを発見させると共に、スポーツの才能を見出す。子どもが長くクラブに留まることを促す。
 - ドイツ体操連盟がコンセプトを開発。
- **休暇キャンプ:**
 - 年6回(イースター、冬、夏など)開催。
 - バイエルン州では年間13週間の長期休暇があり、働く保護者にとって子どもの預け先として非常に人気。温かい昼食も提供。

6. 指導者育成と課題

- **課題:** ドイツでも名誉職(ボランティア)で活動してくれる指導者が減少傾向にある。
- **指導者獲得・育成方法:**
 - 子どもや保護者の中から、人とのコミュニケーション能力が高く、スポーツへの情熱がある人物を見出す。
 - バイエルン州スポーツ連盟(BLSV)が提供する「一般スポーツ実技指導者養成コース」(123時間)への参加を推奨し、資格取得を支援。
 - **研修費用の支援:** 当クラブの場合、指導者候補が研修費用を自費で負担することなく、クラブが費用を出すことが多い(高価な専門分野の研修では1800~2500ユーロかかる場合もある)。
 - **モラル的な約束:** 費用をクラブが負担した場合、指導者は最低3年間はクラブで活動するというモラル的な約束をする(法的拘束力はない)。このシステムは機能しており、離職は稀。
 - **研修の重要性:** 州スポーツ連盟の研修は、スポーツ技術だけでなく、救急処置、病院搬送、法的側面なども含み、質の高い指導者を養成する上で不可欠。ライセンスを持つ指導者の数は、州からの補助金基準にもなる。

7. 行政からの支援

- ドイツでは国がスポーツクラブに直接資金を出すことは稀で、州や市町村が補助金を提供している。
- 日本の文部省が1995年頃、ドイツの地域スポーツクラブを視察後、地域スポーツクラブ育成の取り組みを始めた背景が語られた。

Seminarweg

プロジェクト同期／進捗報告まとめ

1. 財政状況

年間収入

- 会員会費:最大の収入源
- 市・州からの補助金
- 寄付金
- 施設賃貸収入(ボウリング場・体育館の貸出)
- イベント収入(ハロウィン、カーニバル等):年間約 6,237 ユーロ

年間支出

- 人件費:約 120,000 ユーロ(管理人・事務局・指導者への謝礼)
- 施設使用料:年間 5,000～6,000 ユーロ(市所有施設)
- 光熱費:年間 25,000 ユーロ(会員数に基づく定額制)

財政面の特徴・成果

- 実際の光熱費は年間約 100,000 ユーロ相当だが、定額制により大幅に節約
 - 将来の施設建設に向け、100,000 ユーロの貯蓄を達成
-

2. 指導者報酬体系

資格別報酬

- 高資格指導者:時給 20～25 ユーロ
 - 一般指導者:時給 9 ユーロ(交通費込み)
 - 子ども指導専門:時給 15 ユーロ(難易度を考慮)
 - アシスタント:時給 4.50 ユーロ → 来年から 5 ユーロに増額予定
-

3. 施設運営

施設概要

- 利用施設は 1994 年に市が建設
- クラブが土地を市に寄贈し、市が施設を整備
- 午前中:警察訓練、幼児グループ、シニア体操
- 午後(15:00～22:30):常時稼働状態

エネルギーコスト優遇

- 消費量ではなく会員数に基づく定額制

- 年間支払い:25,000 ユーロ
 - 実際の消費量:約 100,000 ユーロ相当(差額分を節約)
-

4. クラブ組織構造

意思決定機関

- 理事会(最上位)
- 拡大理事会(理事会+各部門長)
- 年次総会(全会員対象)

総会の参加状況

- 会員 1,400 名のうち、参加者は約 20 名
 - 重要事項の決定・役員選挙を実施
-

5. 会費体系

年会費

- 13 歳まで:63 ユーロ
- 14~17 歳(学生含む):78 ユーロ
- 18 歳以上:108 ユーロ
- 夫婦・パートナー:186 ユーロ
- 家族(18 歳未満の子ども人数無制限):219 ユーロ

入会金

- 家族:7.50 ユーロ(人数不問)
 - 子ども:30 ユーロ
-

6. 現在の課題

人材確保

- 指導者・コーチの不足
- 理事会メンバーや部門責任者の確保が困難

運営負担の増加

- 事務処理量の増大
- デジタル化への対応
- 官僚的手続きの複雑化

財政の安定化

- 継続的な収入確保と支出最適化が必要

7. 今後の対応事項

- フィットネスルームと共用スペースの建設計画を推進
- 指導者報酬の改定を実施(来年度:アシスタント 5 ユーロ、子ども指導 15 ユーロ)
- 新しい理事会メンバーの募集を継続

Veldener StraBe

クラブの組織構造と役職

会長職

- 2013年から現職を務めており、2週間前に再選された
- 任期は2年間
- 後継者が見つからないため、事実上終身制となっている

スポーツ連盟での役割

- ランツフト市のスポーツ連盟で成人部門の代表を務める
- 市内外の全スポーツクラブを統括する上位組織
- 市との補助金交渉などを担当

地域代表

- バイエルン州ニーダーバイエルン地区の副代表も兼任

クラブの歴史

創設→1920年に社会主義政党(SPD)系のスポーツクラブとして設立

戦時中の閉鎖: 1933年から1945年まで、ナチス政権下で強制閉鎖

施設の変遷:

1949年: 戦後の再設立時に旧建物を建設

1992年: 現在の施設の建設開始

1994年: 現在の施設が完成

現在のクラブ概要

会員数: 約 1,400 名

指導体制: 30 名のトレーナー・指導者

スポーツ種目: 40 種類の異なるスポーツプログラムを提供

会員構成: 1 歳から 14 歳までの子供が非常に多い割合を占める

要約

会議では、スポーツクラブの代表者が組織の歴史と現状について詳細な説明を行いました。

2013 年から現職の会長を務める話者 1 は、2 週間前に 2 年間の任期で再選されました。後継者が見つからない状況で、「終身刑のような」立場となっています。

同時に、話者 1 はランツフートの市スポーツ連盟の代表も務めており、市との補助金交渉などを担当しています。さらに、バイエルン地域(7 つの地域に分かれている)のニーダーバイエルンの副代表も務めています。

クラブの歴史については、1920 年に社会主義系のスポーツクラブとして設立されましたが、1933 年から 1945 年までのナチス政権下で強制的に閉鎖されていました。1949 年の再設立時に古い建物が建設され、現在の施設は 1992 年に建設が開始され、1994 年に完成しました。

現在、クラブには約 1,400 名の会員がおり、30 名のトレーナーやインストラクターが在籍しています。40 種類の異なるスポーツプログラムを提供しており、特に 1 歳から 14 歳までの子どもたちの参加が多いことが特徴です。

チャプター

クラブ運営体制の説明

話者 1 が 2013 年から会長を務め、最近 2 年間の任期で再選されたことが説明されました。また、市スポーツ連盟での役割や、バイエルン地域での副代表としての立場についても言及されました。

クラブの歴史と発展

1920 年の設立から、ナチス時代の強制閉鎖期間(1933-1945 年)、1949 年の再建、そして 1994 年の現施設完成までの歴史が詳しく説明されました。

現在のクラブ規模と活動

約 1,400 名の会員数、30 名のトレーナー陣、40 種類のスポーツプログラムなど、現在のクラブ運営規模について説明がありました。

行動項目

話者 1: 古い建物の写真を後ほど参加者に見せる予定

話者 1: クラブの詳細情報について、参加者からの質問に回答する

話者 1: 会員数の詳細データを提示する

Hauptmarkt

ニュルンベルク市のスポーツ振興制度について

マーク・チャンさんより、ニュルンベルク市におけるスポーツクラブ支援制度について詳細な説明が行われました。マークさんは 7 月からニュルンベルク市の学校・スポーツ担当部門で戦略的スポーツ振興を担当する職員として勤務しています。

基本構造

ドイツのスポーツはスポーツクラブを基盤として構築されており、学校体育(通常 16 時まで)の後には、スポーツクラブが活動の場となります

運営形態

スポーツクラブは主にボランティア(名誉職)によって運営され、会員は年会費を支払って様々な活動に参加できます

クラブの多様性

独自の施設を持つ大規模クラブから、市の施設を借りて活動する小規模クラブまで様々です

補助金の対象条件

市からの支援を受けるためには以下の条件を満たす必要があります:

- ・非営利のスポーツクラブであること
- ・会員の 50%以上がニュルンベルク市民であること
- ・会員の 20%以上が 26 歳以下の青少年であること
- ・適切な会費制度を設けていること

直接的な補助金制度

運営費補助金(最大の支援項目)

施設維持費:独自のスポーツ施設を運営するクラブへの暖房費等の支援

指導者補助金:資格のある指導者を雇用するクラブへの支援

青少年補助金:青少年会員が多いクラブへの追加支援

会員数補助金:会員数に応じた支援

交通費補助金:ドイツ選手権や1部・2部リーグ参加チームの交通費支援

投資補助金(第2位の支援項目)

新規建設・改修:新しい体育館建設や既存施設改修に対して45%の補助

州からの追加支援:バイエルン州スポーツ連盟から20%(将来的に25%予定)の追加補助

合計支援率:現在65%、将来的に70%の支援が可能

災害時特別支援:洪水などの災害時に最大90%まで支援可能です。

年間予算:110万ユーロの投資補助予算を設定

特別補助金制度:年間21万ユーロの予算で以下の支援を実施:

クラブ経営コンサルティング:外部コンサルタント費用の50%支援

専属職員雇用支援:段階的減額方式による人件費支援

将来性確保支援:合併や特別プロジェクトへの支援

危機対応支援:緊急時の問題解決支援

インクルージョン支援:障害者や難民受け入れ事業への支援

間接的な支援制度

市営体育館の優遇利用

利用料金:一般企業の85%割引料金でスポーツクラブが利用可能

青少年割引:青少年会員が多いクラブはさらに割引適用

施設規模:800平米の体育館を5-10ユーロ/時間で利用可能

市営プール施設

利用料金:一般料金の 50%割引でスポーツクラブが利用可能

公共スポーツ事業

優秀選手表彰制度:年間を通じた優秀な選手・チームの表彰

公共運動施設:市民向け運動公園の整備

無料指導プログラム:「一緒にやろう、元気でいよう」プログラムでの無料指導

統合・包摂事業:難民や障害者向けの特別プログラム

現在の課題と今後の展望

主要課題

施設運営コスト:独自施設を持つクラブの光熱費等運営費増大

施設老朽化:既存施設の省エネ改修の必要性

施設利用効率:デジタル予約システムの導入による利用率向上

大規模プロジェクト

TSV アルテンフルト:2000 万ユーロのスポーツキャンパス建設計画(市負担 1150 万ユーロ)

新規体育館建設:2030 年までに 33 の新しい体育館ユニット(各 400 平米)を建設予定

将来的な方向性

予算維持:現在の支援レベルを維持(大幅な増額は困難)

効率化:クラブの自立発展を促進する支援制度の充実

施設拡充:人口増加に対応した学校附属体育館の増設

対応事項

@参加者: 今回の説明内容について各自の所属団体で共有・検討

@マーク・チャン: 追加質問があれば対応準備

@市スポーツ部門: デジタル予約システムの導入進捗確認

Waaggasse

トランスクリプトの要点は、学童保育制度「Hort(ホルト)」について説明しており、その仕組み、提供されるサービス、費用、歴史的背景、そしてそれに伴う複雑さや負担が議論されています。

以下に、主要な論点と情報をまとめます。

- **学童保育制度「Hort(ホルト)」の概要**
 - 学校の授業終了後に子どもを預かるサービスです。
 - 夏休みなどの長期休暇中(最長 4 週間まで)も子どもを預かるサービスを提供します。
 - これは子どもが保育を受ける「権利」として位置づけられています。
- **放課後ケアの選択肢**
 - **タイプ 1:** 午後の授業が終了した後、学校で食事をとり、保護者が迎えに来て帰宅します。
 - **タイプ 2:** 上記に加え、宿題のサポートも提供されます(例として午後 2 時までと述べられています)。
 - これらのサービスには、保護者が費用を支払います。
- **歴史的背景**
 - 子どもが放課後に学校に残り、ケアを受けるという概念は、約 50 年前から存在しており、決して新しいものではありません。
- **制度の複雑さと課題**
 - 学童保育の仕組みは「とても複雑」と指摘されています。
 - また、この制度には現在の国において「少し負担を感じる」側面があるとも述べられています。

ニュルンベルク市スポーツ局

移民・難民統合プログラム概要(進捗報告)

アンドレア・アッカーマンさんと息子のレオン・アッカーマンさんは、ニュルンベルク市スポーツ局において、過去 10 年間にわたり移民・難民の社会統合を目的としたスポーツプログラムを実施してきました。

現在、ニュルンベルク市では住民の 50%以上が移民・難民の背景を持ち、出身国も 30 カ国以上に及びます。この多文化社会の中で、スポーツを通じた「出会い」「交流」「社会参加」を促進する取り組みが進められています。

プログラムの 5 つの柱

1. オープンな出会いとスポーツ提供

- サッカー、ボクシング、バレーボール、バスケットボールなど、多様な種目を誰でも参加可能な形で実施。
- 学校や難民収容施設を訪問し、直接プログラムを紹介。
- 移民・難民背景を持つ住民をスポーツコーチとして育成し、コミュニティ貢献を促進。

2. 住居とスポーツの連携

- 共同収容施設に住む難民を対象に、隣接施設を活用したスポーツ活動を展開。
- 市として「歓迎の姿勢」を示し、信頼関係の構築を重視。

3. 学校とスポーツクラブの連携

- 生徒の50%以上が移民・難民背景を持つ学校でプログラムを実施。
- 格闘技(テコンドー・空手)とチームスポーツを組み合わせ、
 - 格闘技:集中力・礼節を育成
 - チームスポーツ:協調性を向上

4. 難民収容センターでの活動

- アンカーセンター(初期収容施設)でスポーツを直接提供。
- 亡命手続きの情報提供やカウンセリングも実施し、不安軽減と地域適応を支援。

5. 競技スポーツ支援

- 世界選手権保持者やオリンピック経験者など、ハイレベル難民アスリートを支援。
- ドイツオリンピック委員会と連携し、トレーニング機会や奨学金制度を提供。

現在の体制と資金調達

2025年6月から、担当スタッフを4名体制へ拡大予定。

これまで10年間はアンドレアさん1名での運営だったが、EUおよびドイツ連邦移民・難民庁から3年間の資金援助(人件費の90%補助)を受け、体制強化が可能となった。

この支援は、10年間の成果が高く評価された特例措置である。

主な成果

- 過去5年間で、120名を職業訓練や就職に導くことに成功。
 - うち17名は本国送還、数名は送還を避け他国へ移住したが、全体として非常に高い成功率を維持している。
-

ニュルンベルク市の背景

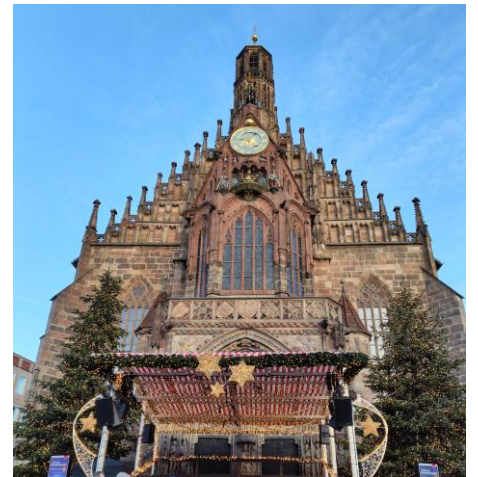
ニュルンベルクは「人権の街」「スポーツの街」として知られており、第二次世界大戦後のニュルンベルク裁判 80 周年を迎える歴史的背景を踏まえ、未来志向の社会づくりに積極的に取り組んでいる。

今後の対応事項

- @レオン・アッカーマン: 難民収容施設でのスポーツコーチ養成プログラムを継続
- @アンドレア・アッカーマン: EU および連邦政府への資金援助継続に向けた報告書作成
- @スポーツ局チーム: 2025 年 6 月の 4 名体制移行に向けた準備



ランツフト市市長表敬訪問についての地元紙の記事



【編集後記】

第4回ドイツスポーツ視察研修会報告書をまとめるにあたって、参加者の皆さんのチームワークの良さと健康で全員が元気に視察研修会が終わったことに感謝しました。そして、帰国してから直ぐに報告書の原稿締め切り日を設けましたが全員が締め切り日より前に送信していただけたことにも感謝いたします。そして、訪問期間中の天候にも感謝しています。リラックスする日は、快晴になって冬としては奇跡的な青空(現地の人言葉)になって、私が大好きなドイツ各地の素晴らしい風景を見ていただくことができました。ミュンヘン市アリアンツ・アリーナからの帰り道、夕日に映えるアルプスが遠くに観えた時は感動しました。

ミュンヘン市、初めて訪問したランツフート市、大好きな友人がたくさんいるニュルンベルク市の皆さんと通訳の激務を元気よく遂行してくれた高橋範子さんに心から感謝します。「フィーレン ダンク ドイツ」

出会いと学びに感謝



発行年月日：2025年12月18日

発行責任者：NPO 法人新町スポーツクラブ

理事長 小出利一